

京都府立大学 大学院生の現状とニーズ調査 報告書 (2014 年度実施)



京都府立大学男女共同参画推進室

2015 年 3 月

目次

調査の目的.....	1
I. 調査概要.....	2
II. 調査結果の概要.....	3
III. 調査結果（項目別）.....	7
1. 調査協力者の属性.....	7
(1) 本学全体との比較.....	7
(2) その他.....	11
2. 研究生活に関わる基本情報.....	12
(1) 在学時間.....	12
(2) アルバイト時間.....	15
3. 研究生活の状況.....	17
(1) 進学理由.....	17
(2) 研究環境.....	23
(3) 相談相手.....	28
(4) 研究生活への満足度.....	31
4. 支援事業.....	34
(1) 支援ニーズ.....	34
(2) 期待度.....	36
(3) 利用の現状.....	42
5. 自由記述.....	45
6. 総括.....	50
IV. 調査票.....	51
V.男女共同参画推進委員会体制.....	59

調査の目的

京都府立大学は、平成 25（2013）年度からの 3 年間、文部科学省科学技術人材育成費補助事業「女性研究者研究活動支援事業（一般型）」の対象機関として採択された。この事業は、女性研究者等がその能力を最大限発揮できるよう、出産、子育て、介護等のライフイベント、研究と生活との調和すなわちワーク・ライフ・バランスに配慮した研究環境の整備及び研究力向上のための取り組みを支援するものである。そして、本学ではこの目的を達成するため、女性研究者の比率向上、研究活動と生活の両立支援、若手研究者の育成、教職員／学生が働きやすい／学びやすい環境整備等を目指した事業展開がなされている。

その一つである若手研究者支援事業（あおいプロジェクト）では、スキルアップセミナーの開催、相談窓口の設置、メンター制度の創設等を今年度行ってきた。本調査はその第一歩として、大学院生の研究生活の現状ならびに支援ニーズの把握を目的として実施されたものである。具体的には、本学若手研究者（大学院生）の進学理由、研究生活の現状、研究上の困難及び支援ニーズ、希望している進路等について明らかにし、若手研究者支援事業及び本学における大学院生の支援を行うための基礎的データとすることを狙いとしている。

以上のことを踏まえて、本報告書では、調査の概要について述べた後、調査結果を開示し、要因や背景事情の考察、今後の事業展開に向けた提言を行う。なお、調査協力者の属性に関する結果を先に述べ、その後は調査票の質問順に説明を進めていくこととする。

I. 調査概要

■ 対象

平成 26（2014）年 5 月 1 日現在、本学に在籍する全ての大学院生（社会人学生・留学生を含む）を対象とした。

■ 調査時期

平成 26（2014）年 5 月 15 日（木）に配布を行い、回収は 6 月 6 日（金）に締め切った。

■ 調査方法

自記式による質問紙調査を行った。基本的には選択式となっているが、一部で自由記述式を採用した。また、一部の設問については、博士前期課程院生のみ、あるいは博士後期課程院生のみ回答を限定している。配布について、平成 26（2014）年 5 月 15 日（木）に行われた教員会議において、調査実施の周知と共に、指導教員からの配布協力を依頼した。回収については、男女共同参画推進室と学務課に返却ポストを設置した。調査協力者がそれぞれ返却ポストに提出を行ったが、ゼミ単位で代表者がまとめて返却ポストへ提出するというケースも確認された。また、指導教員がまとめて返却ポストに提出、あるいは男女共同参画推進室に提出するというケースも確認された。

■ 調査内容

属性・進学理由・希望進路・研究環境・研究生活の現状・悩みの解決方法・今後の支援ニーズ・男女共同参画事業の認知度等

なお、自由記述による回答を求めた項目もあるが、本調査報告においては分析結果から除外している。

■ 回収票数・回収率

配布数 309、回収票数 125、回収率は 40.5%という結果となった。

研究科	院生数	有効回収数	有効回収率
文学研究科	80	25	31.3%
公共政策学研究科	28	11	39.3%
生命環境科学研究科	201	89	42.8%
計	309	125	40.5%

■ 使用ソフト

データの集計とグラフ作成は Microsoft Excel2010 を用いた。また、Fisher の直接確率検定は、フリーソフトである R version3.0.2. を用いて行った。

Ⅱ．調査結果の概要

主な調査内容の結果の概要と男女共同参画推進委員会による考察を記載する。なお、ここでは統計的な有意性は考慮していない。

■ 大学院への進学理由について (Q2)

博士前期課程の進学理由は「専門領域（テーマ）を深めたい」（90%）が最も多く、次に「専門領域（テーマ）以外を含めてもっと勉強したい」（71%）、「研究者（大学教員含む）になりたい」（49%）と続き、研究志向が高い。また、就職にかかわることを理由に挙げる者の割合は、「就職に有利だから」（35%）、「卒業時に希望する就職先に入れなかった」（14%）と少ない。博士前期課程への進学理由は研究志向が強いことがわかる。

博士後期課程への進学理由は、「専門領域（テーマ）を深めたい」が100%、次いで「研究者（大学教員含む）になりたいから」は91%で、博士前期課程と比較して、研究者になりたい、研究領域をより深めたいと考えている者の割合が高く、研究者を目指すことを明確に意識していることがうかがえる。

大学院への進学理由と性別との関係を見ると、「性別に関係なく能力が発揮できそうだから」という理由について、博士前期課程では「まったく当てはまらない」（41%）が最も多く、博士後期課程では「どちらとも言えない」（46%）が一番多い。また、博士後期課程において「研究者（大学教員を含む）になりたいから」という進学理由に「あてはまる」と回答した者の男女別の割合は、男性が100%、女性が87%であり、男性と比較して女性の方が研究者を志望する割合が低い。これは女性にとって研究職は不利と捉えているのか、多様なキャリアパスのための進学なのか等の理由を今後委員会としては知るべきであろう。

■ 本学の研究環境について (Q3)

本学の研究環境についての認識は、「あてはまる」と回答したものが多し順に「研究をするうえで適切な指導を受けることができる」（全体 90%：男性 89%, 女性 90%）、「性別に関係なく、自分の能力を発揮できる環境にある」（全体 79%：男性 76%, 女性 81%）、「学内に研究や進路について相談できる人がいる」（全体 76%：男性 80%, 女性 74%）と肯定的な回答が多数を占める。研究環境への満足度は高いといえるだろう。また、「性別に関係なく自分の能力を発揮できる環境にある」（全体 79%：男性 76%, 女性 81%）については、女性の学生・大学院生数が多いためか、性別による阻害要因や不利益をあまり感じていないことが見てとれる。

一方、研究設備等に関する満足度は「あてはまらない」（33%）、「どちらとも言えない」（26%）とあまり高くなく、改善が期待される。

■ 大学院生の抱える悩みと相談相手について (Q4、Q5)

大学院生の研究生活において困っていること・悩んでいることについて「悩んでいる」という回答の割合が高かったのは、順に「研究（論文）の進め方」（65%）、「希望進路（就職先）につけるかわからないこと」（63%）、「研究における自分の適性」（58%）、「経済的なこと」（57%）、「希望進路（就職先）が明確にならないこと」（56%）であった。カテゴリー別に見ると、「悩んでいる」という回答の割合が高い順に「経済面」、「進路」、「研究」、「健康面」、「人間関係」であった。総じて「短期的」な「現在」の悩みが多いことが伺われた。

性別による違いをみると、男女間で性別によって差が見られた項目は、「希望進路（就職先）に就けるかわからないこと」で、「悩んでいる」と回答した者の割合は男性が59%、女性が67%であった。さらに、「希望進路が明確にならないこと」でも、「悩んでいる」を選択した回答者は男性が45%、女性が65%であり、女性の方が高くなっている。これは、進学理由と合わせて、研究への意識は高いが、それを活かせる進路の選択肢が女性の方が少ないと考えられているからであろうか。

また、「研究と結婚・育児を含めた将来のライフプラン」に対しての悩みはそれほど多くない。「悩んでいる」と回答した割合は男性が37%、女性が41%で、性別による差はあまりみられなかった。これは、本調査は大学院生を対象としており、回答者の多くが20代前半であるので「結婚・育児等」についてリアリティを持って捉えていないこと、また、「結婚・育児等」の選択を実現する上で関わる「就職」や「生活の安定」という不安要素があるため、現段階では意識に性差がみられないと考えられる。

研究生活における悩みの相談相手については、相談相手として「あてはまる」という割合が高い順に、「指導教員」（76%）、「友人・恋人」（70%）、「研究室の仲間」（67%）、「研究室の先輩・後輩」（67%）、「家族（親・きょうだい）」（48%）、「指導教員以外の教員」（45%）、「学生相談室」（4%）となった。これらから、相談相手を選ぶ際には、「研究との関連性」や「日常的な接触頻度」という2つの要素が影響を与えていることや、大学院生にとって学生相談室は身近な相談場所としてあまり認識されていないことがわかる。

■ 研究生活の満足度 (Q6)

「研究に意欲を持って取り組んでいる」という設問に対して「あてはまる」と回答した者の割合は80%と際立って高くなっており、大学院生の意欲の高さがうかがわれる。続いて、「研究・指導体制に満足している」（66%）、「研究生活全般において満足している」（51%）ともそれぞれ「あてはまる」とした回答者の割合は高く、研究生活全般に満足していることがわかる。一方、「研究において能力が発揮できている」に対して「あてはまる」と回答した者は37%と比較的低く、「あてはまらない」は18%、「どちらともいえない」が45%と半数近くを占めていた。多くの学生が自らに対する評価をしかねていることが読み取れるが、これは研究の難しさ（簡単には良い成果は得られないこと等）に直面しているためかもしれない。

■ 男女共同参画推進室に期待する支援と相談窓口のニーズについて (Q7、Q8)

男女共同参画推進室に期待する支援として、将来的なニーズも含めると「経済面での支援」を利用したいという割合が 79%と最も高くなっていた。続いて「研究支援のためのスキルアップ講座」を必要とする者の割合が高く、その中でも、「プレゼンテーション能力」(77%)、「英語論文作成」(74%)、「調査研究スキル等」(67%)の、研究活動に直結するスキルを向上させることを望んでいる割合が高くなっていた。また、「健康面（女性の場合は女性特有の悩みも含む）の支援」や「進路・就職相談窓口」については、「今必要がある」と答えた回答者がそれぞれ 18%、27%でニーズが低いように見られるが、今後必要となったときの将来的ニーズを含めて「利用したい」という割合は、61%、62%と高い。これはニーズとしては顕在化していないが、将来的な人生設計におけるリスク要因と捉えているものと考えられる。

大学院生専用の相談窓口があれば、どのような悩みについて利用したいかを問う設問では、「利用したい」と回答した者の割合が高い順に、「進路（就職）のこと」(75%)、「経済面での支援」(73%)、「健康面」(53%)、「研究の進め方」(53%)、「結婚・育児を含めた将来のライフプラン」(48%)と続き、最も低い割合となったのは「人間関係のこと」(32%)であった。進路や経済面へのニーズの高さは、大学院生が現在抱えている悩みとリンクしているものと考えられる。また、「人間関係のこと」や「研究の進め方」については、研究生生活全般の満足度が高く、悩みがあっても教員や仲間に相談できると考えているため、ニーズとしては高く位置付けられていないのだろう。なお、性別による違いに着目すると、「経済面での支援」以外の全ての項目において「利用したい」と回答する割合が男性よりも女性の方が 10%以上高くなっている。これは相談や依頼を行うといった行為自体への親和性の性差の表れとも考えられる。

■ 男女共同参画推進室やその取組に対する認知度について (Q9)

男女共同参画推進室やその取組に対する認知度は低いことが分かった。推進室の場所やホームページ、実施しているセミナーや制度について尋ねているが、全体的に約 65%～70%が「知らない」と回答し、「知っている」と回答した者の中でも「利用したことがある」と回答した者はいずれも 5%前後であった。今後、企画の実施や男女共同参画推進室の理念の周知にあたっては、対象を絞った広報の強化や手段の再検討が必要であると考えられる。

■ まとめ

本学大学院生は、研究意欲があり、現時点での性別による不利益をあまり感じてはいない。しかし、設備への不満、就職の不安（性別問題含む）、適性への悩みを抱えている。委員会として、これらの事実を把握し、今後の活動に活かしていく必要がある。今回、大学院生の短期的なニーズとしてはスキルアップセミナー等、研究に直結する講座を望んでいること

がわかった。今後は研究支援のためのスキルアップ講座は積極的に進めていきたい。

一方、相談窓口など現在のニーズとしては認識されていないが、将来的に必要となれば利用したいという者の割合が高い項目については、顕在化していない潜在的な不安要因と捉えられていることが考えられる。このように表立っては出てこない問題、見えない問題について対応できるよう、個別に出張相談を行うなどしてニーズを拾いあげ、問題の可視化に取り組みたい。最後に、男女共同参画推進室からの情報発信の方法については軌道修正が必要である。現在までのものに加え、推進室から働きかける形や本学における推進活動の一員であることを意識できる形のネットワークづくりを進めていきたい。

Ⅲ. 調査結果（項目別）

1. 調査協力者の属性

（1）本学全体との比較

調査協力者の性別内訳を見ると、男性 55 名（44.0%）、女性 70 名（56.0%）と、女性がやや多い結果となった。その他、課程別、研究科別にも男女比率を調べ、さらに本学全体の傾向と比較した¹。博士後期課程においては、本学全体の傾向とは異なって、女性の割合が男性よりもかなり高くなっていたが、その他は概ね本学全体の傾向と一致していた。また、文学研究科においても、女性の割合が男性よりもかなり高くなっていた。本学全体のデータよりも男女比率に開きはあるが、女性が男性より多いという点では一致するものであった。

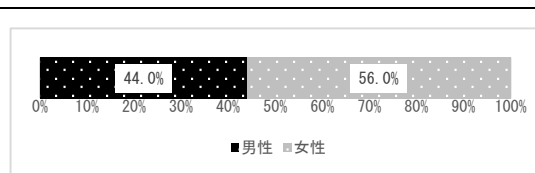


図 1-1-1 調査協力者の男女比率

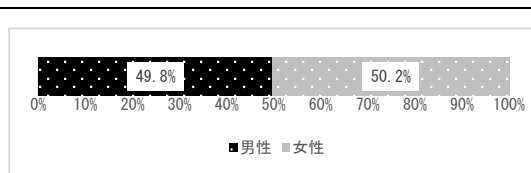


図 1-1-2 本学における大学院生の男女比率

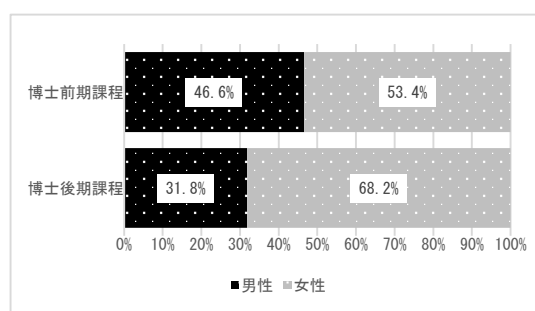


図 1-1-3 調査協力者の男女比率（課程別）

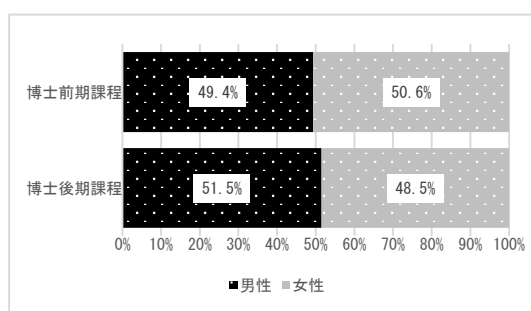


図 1-1-4 本学における大学院生の男女比率（課程別）

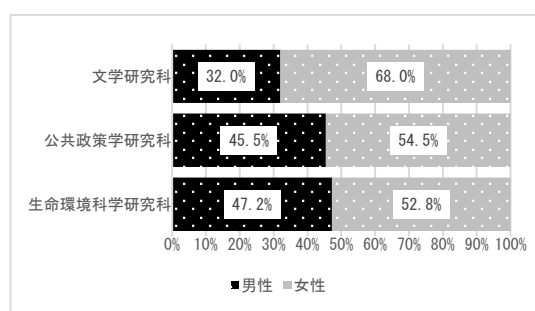


図 1-1-5 調査協力者の男女比率（研究科別）

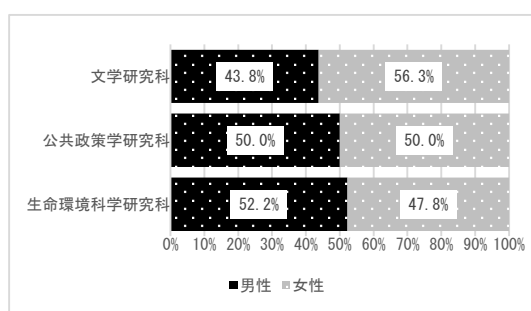


図 1-1-6 本学における大学院生の男女比率（研究科別）

次に、調査協力者の研究科内訳を見たところ、文学研究科 25 名（20.0%）、公共政策学研

¹ 本学全体についてのデータは「京都府立大学概要（平成 26 年度）」において公表されているものを利用した。
(<http://www.kpu.ac.jp/cmsfiles/contents/0000003/3847/26.pdf>) (20150126 取得)

究科 11 名（8.8%）、生命環境科学研究科 89 名（71.2%）となり、本学全体の傾向とかなり近い割合となった。課程別に見ると、博士前期課程では文学研究科の割合が高く、博士後期課程では文学研究科の割合が低くなり、その分生命環境科学研究科の割合が高くなっていた。これは本学全体の傾向と反対の結果であった。男女別に見たところ、男性協力者の研究科比率は本学全体と同様の傾向を示していたが、女性では文学研究科の割合が低く、生命環境科学研究科の割合が高くなっていた。

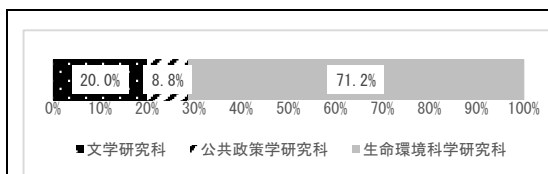


図 1-1-7 調査協力者の研究科比率

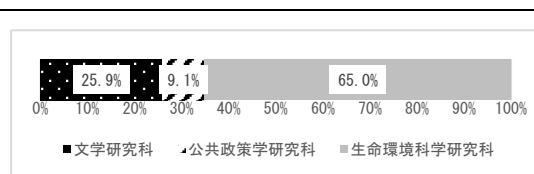


図 1-1-8 本学における大学院生の研究科比率

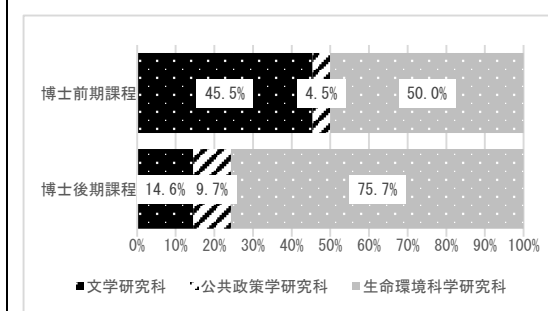


図 1-1-9 調査協力者の研究科比率
(課程別)

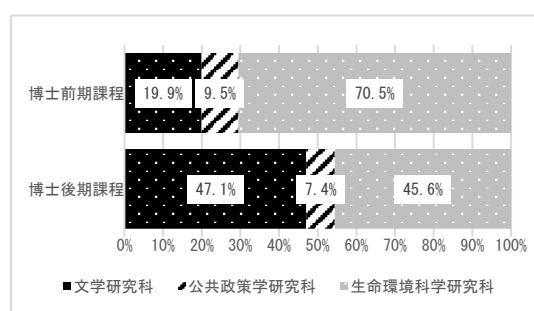


図 1-1-10 本学における大学院生の研究科比率
(課程別)

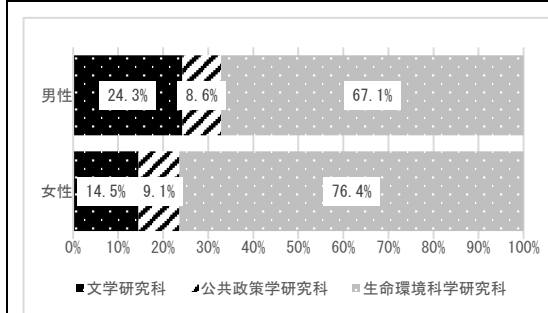


図 1-1-11 調査協力者の研究科比率
(男女別)

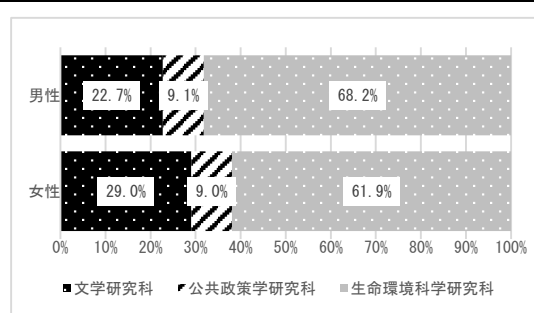
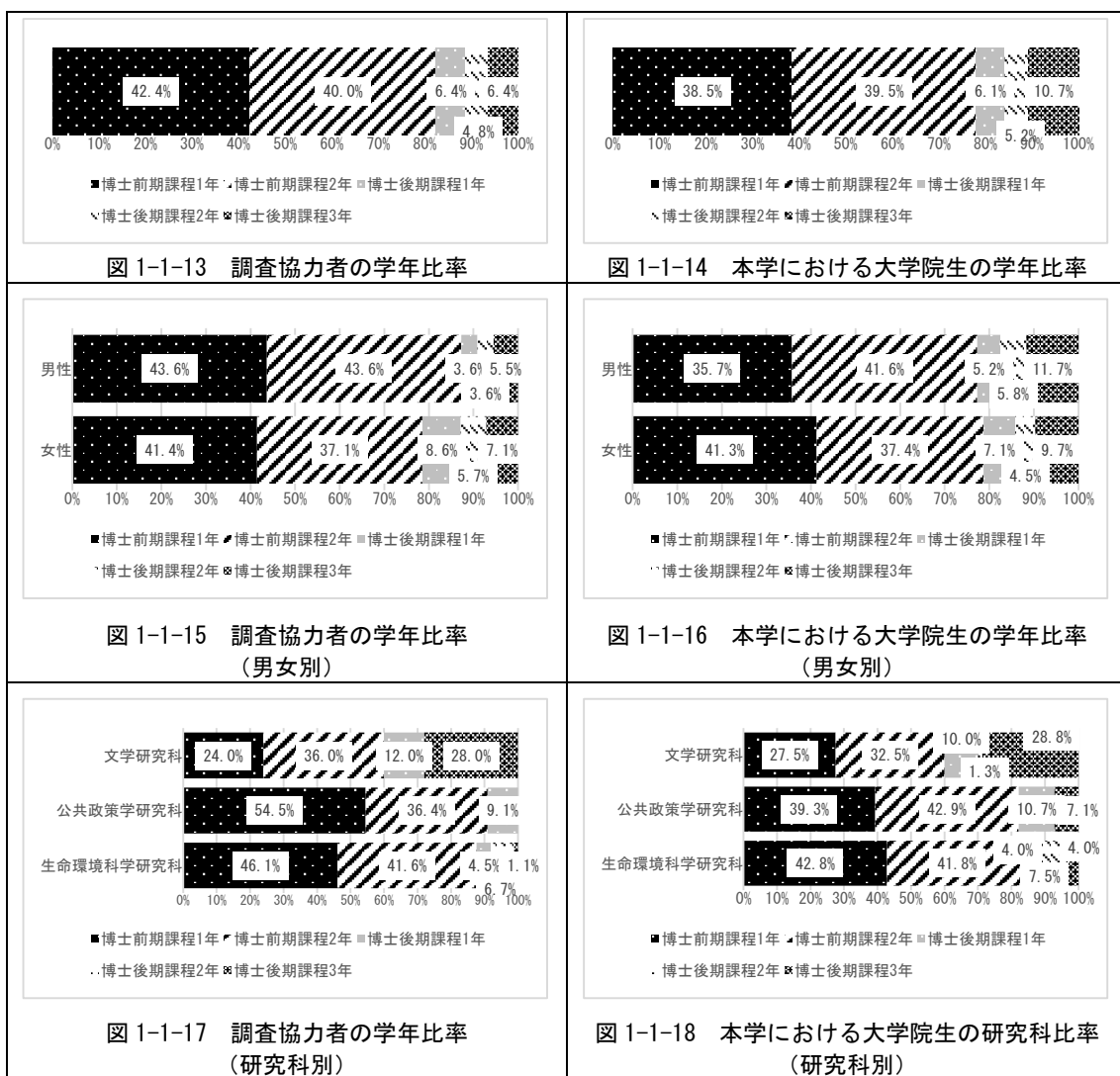
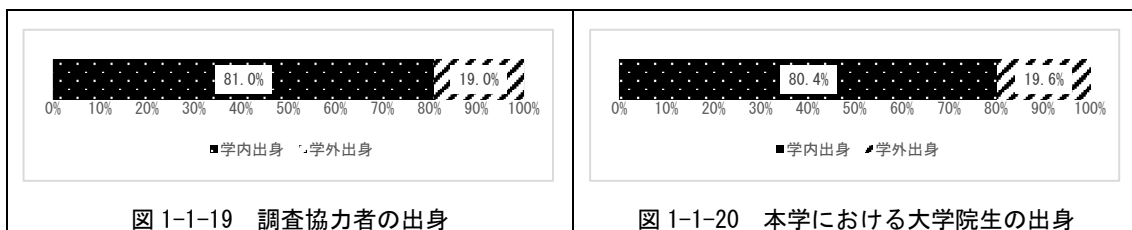


図 1-1-12 本学における大学院生の研究科比率
(男女別)

続いて、調査協力者の学年内訳を見てみると、博士前期課程と博士後期課程の比率が概ね 4 対 1 となっており、本学全体の傾向と一致していた。また、いずれも、毎年度の入学定員数が変わらないことから分かる通りに、それぞれの課程における各学年の院生はほぼ同程度の比率となっていた。性別により比較したところ、本学全体の傾向とは異なる違いが見られた。研究科別に比較したところ、研究科間での違いは調査協力者においても本学全体においても見られたが、調査協力者に関しては本学全体と同様の傾向を示していた。

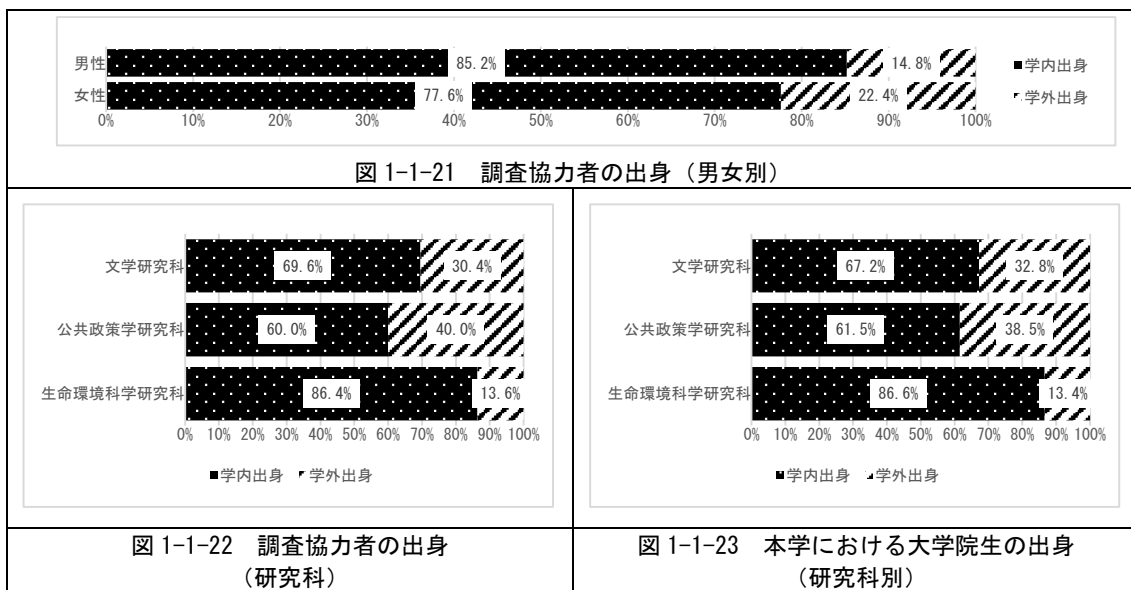


学部所属に関しての学内出身／学外出身の別を見たところ、学内出身と学外出身の比率が概ね 4 対 1 となっており、本学全体の傾向と一致していた²。性別による違いを見ると、男女間で数ポイントの差はあるが、いずれも学内出身が 80%前後を占めていた³。研究科間で比率に違いは見られるが、全体的に学内出身者が多いことが分かった。また、数値上も本学全体の傾向とかなり一致していた。

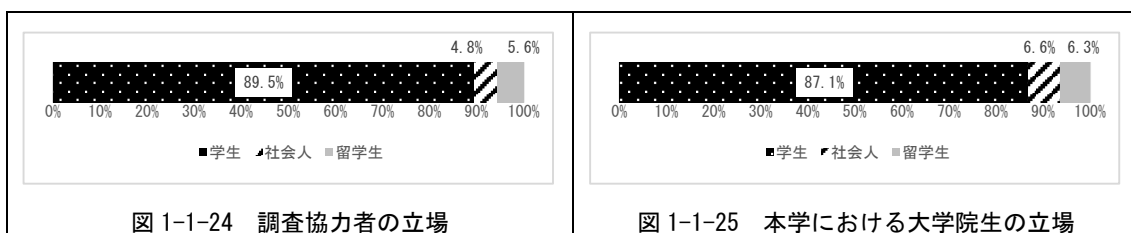


²「京都府立大学概要（平成 26 年度）」では学内出身／学外出身の別が記載されていないため、平成 26（2014）年度から平成 24（2012）年度の「京都府立大学大学院入学者状況」より算出した（下記より各年度へのリンクあり）。
http://www.kpu.ac.jp/contents_detail.php?co=cat&frmId=3691&frmCd=3-12-0-0-0（20150202 取得）

³性別による出身を示すデータは得られなかったため、比較を行っていない。



調査協力者の学生・留学生・社会人の別を表す立場⁴について見ると、本調査においても、本学全体においても、約 90%と圧倒的に学生の割合が高くなっている。性別による比率の違いはほとんど見られないが、研究科による違いは確認された。生命環境科学研究科ではほとんどを学生が占めるという割合になっているが、公共政策学研究科では 50%近くまで低くなっていた。本調査における文学研究科ならびに公共政策学研究科の回答者は生命環境科学研究科と比較してかなり少なくなっているが、本調査と本学全体の動向を比較する限りにおいては大きな違いはなく、むしろよく似通っていると言って良いだろう。



⁴ 本調査では回答時の選択による調査協力者の意思表示にて区別をし、調査時点で明確な定義付けは行っていない。また、本学全体の動向については、やはり大学概要にデータが無かったため「京都府立大学大学院入学者状況」を利用したが、ここでも説明はなされていない。そこで参考までに、文部科学省による「学校基本調査」における定義について説明しておく。まず、「社会人学生」は「①職に就いている者（給料、賃金、報酬、その他の経常的な収入を得る仕事に現に就いている者）、②給料、賃金、報酬、その他の経常的な収入を得る仕事から既に退職した者、③主婦・主夫」とされている。「留学生」については、当該学生の出入国管理及び難民認定法上の在留資格（査証）が「留学」であれば「留学生」に、それ以外であれば「留学生以外の外国人学生」とであるとして説明されている。また、学校基本調査では「社会人学生」であり、「留学生」でもあるという可能性も存在するが、学校基本調査においても、また本調査において特に、「社会人学生」にも「留学生」にもいずれも分類されないものが「学生」に当てはまるものとして考える。なお、学校基本調査については、以下を出典としている。

「平成 26 年度学校基本調査の手引（大学，短期大学，高等専門学校）」（http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2014/03/28/1345977_1.pdf）（20150209 取得）

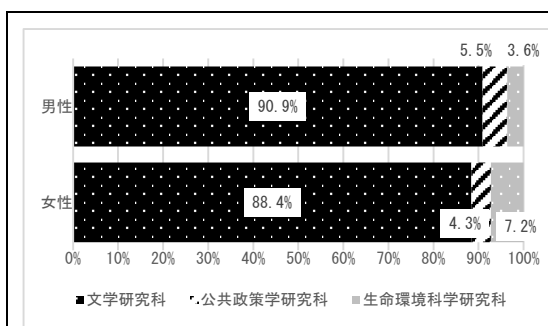


図 1-1-26 調査協力者の立場
(男女別)

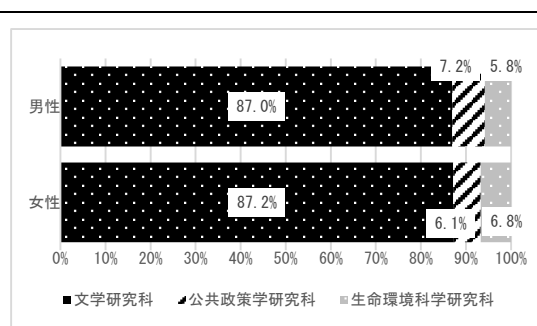


図 1-1-27 本学における大学院生の立場
(男女別)

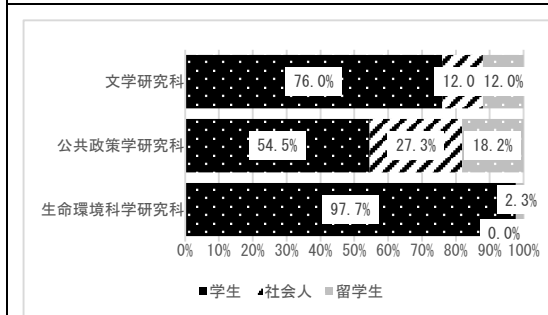


図 1-1-28 調査協力者の立場
(研究科別)

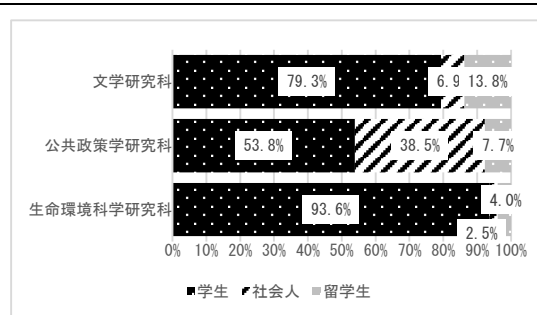


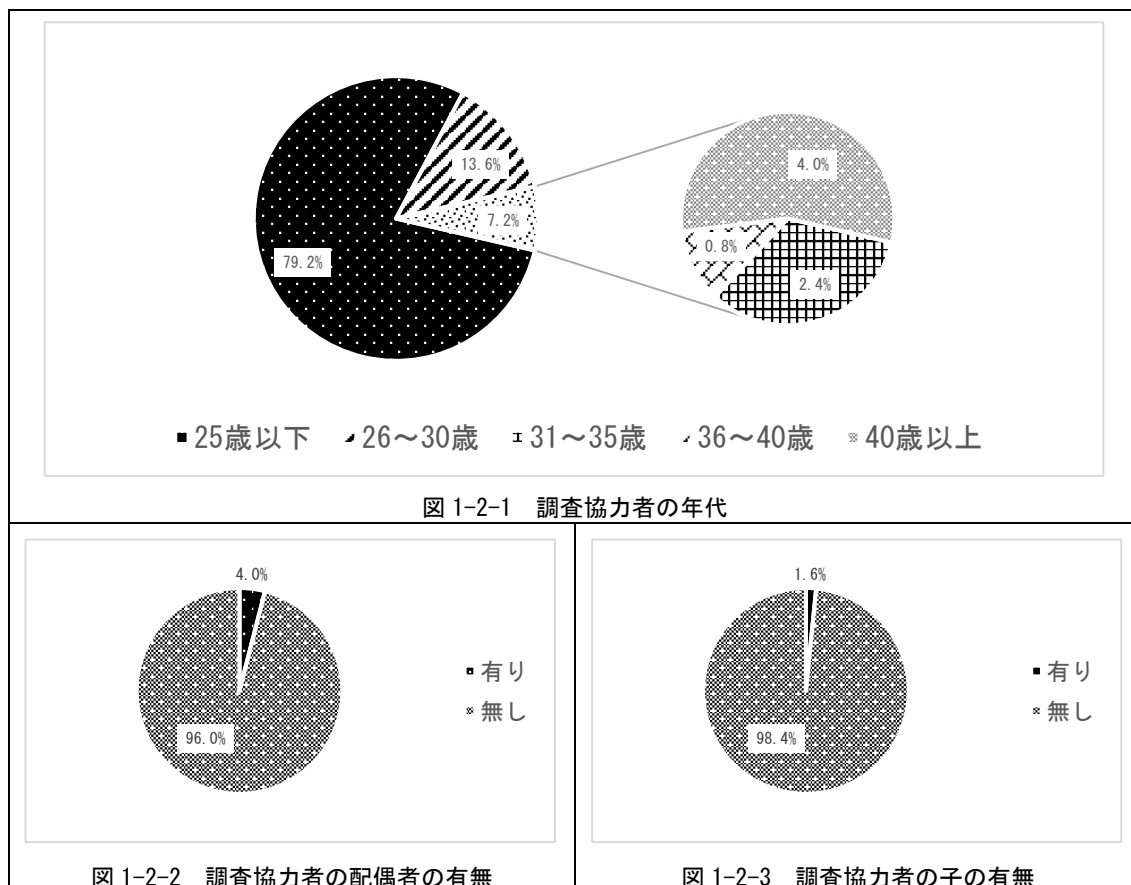
図 1-1-29 本学における大学院生の立場
(研究科別)

ここまで、特に性別や研究科の違いに着目して調査協力者の内訳を概観してきた。調査協力者は一見すると本学の大学院生全体をよく代表している様にも思えるが、いくつかの異なる傾向が相殺された、見かけ上の結果に過ぎないことが分かった。本調査は「本学若手研究者（大学院生）の進学理由、研生活の現状、研究上の困難及び支援ニーズ…等について明らかに」することを目的とし、また、それらへ向けた「支援を行うための基礎的データとすること」を目的としている。調査協力者（標本集団）が本学全体をよく代表するサンプルであったならば、得られた結果について、回答割合の高さをそのまま優先順位として施策展開に繋げれば良いが、この基礎情報からは決してそうではないことが分かる。したがって、調査協力者の中での相対的な違い、例えば男女や研究科の違いを基準として何が分かるのか、何が考えられるのかといった、むしろ要因分析や背後に潜む問題の解明に主眼に置かねばならないことに留意して、本報告書（調査結果）を取り扱わねばならない。

(2) その他

調査協力者の年代について、約 80%が 25 歳以下、90%超が 30 歳以下という結果となった。調査協力者の圧倒的多数が（留学生や社会人ではなく）学生であること、博士前期課程の院生が約 80%という結果であったことから考えると、それらの事情がそのまま反映された結果であったと言えよう。また、調査協力者の配偶者の有無、子の有無についても尋ねているが、いずれも圧倒的多数の回答が「無し」であった。個別具体的なニーズを抽出するこ

と自体には、「研究と生活との調和」すなわち「ワーク・ライフ・バランスに配慮した研究環境の整備及び研究力向上のための取り組みを支援する」という本事業の目的にとって大いに意義あるものとなろう。しかし、その過程において回答者を特定することになりかねないので、本調査ではこれ以上の詳細な分析を回避することとした。



2. 研究生活に関わる基本情報

(1) 在学時間

図 2-1-1 は調査協力者の 1 日当たりの平均在学時間についての回答状況を表したものであり、図 2-1-2 は平均在学時間を男女別に比較したものである。これらを見ると、いずれも中央値・最頻値が共に 8～10 時間となっている。しかし、6～8 時間を選択した割合が男性よりも女性の方がかなり高くなっており、逆に 4～6 時間、あるいは 14 時間以上を選択した割合は女性よりも男性の方がかなり高くなっている。すなわち、男性の方が個人によって平均在学時間に大きな開きがあり、女性の方が中央値・最頻値に近いところにより集中しており、その意味で個人によるバラつきは男性よりも小さくなっているものと考えられる。

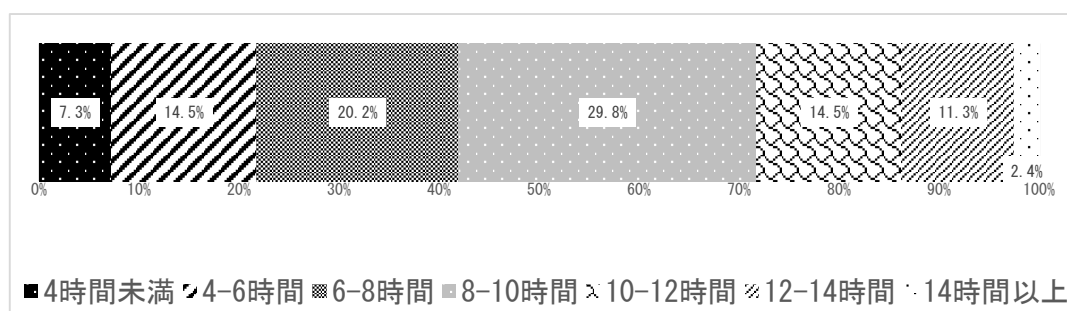


図 2-1-1 調査協力者の在学時間

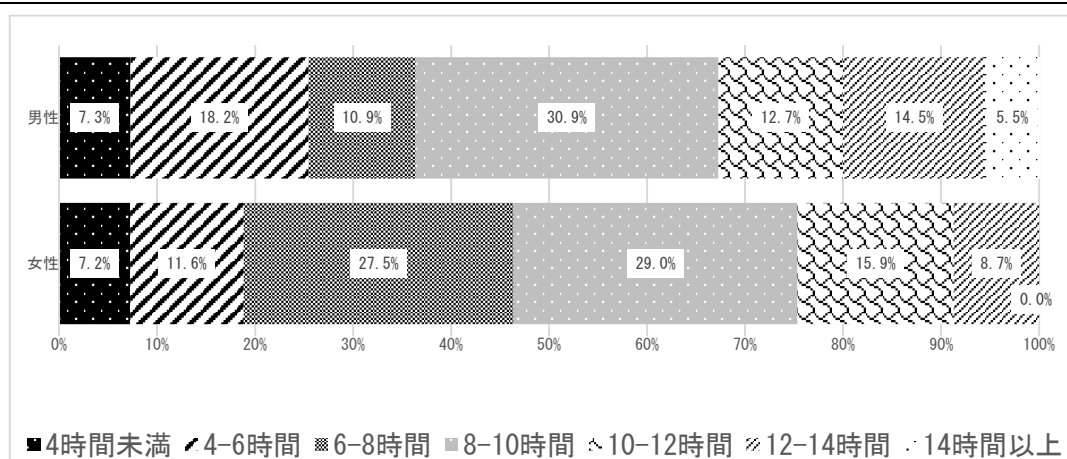


図 2-1-2 調査協力者の在学時間
(男女別)

大学院生の平均在学時間について、男性の方が女性よりも個人間のバラつきが大きいという傾向は見て取れたが、全体の傾向と比較するとそれ程違いは無いと言って良いだろう。それに対し、図 2-1-3 に示す通り、平均在学時間は研究科によって大きく異なっている。中央値を見ると、文学研究科、公共政策学研究科が 4～6 時間であったのに対し、生命環境科学研究科では 8～10 時間であった。また、最頻値を見ると、生命環境科学研究科では 8～10 時間であったのに対し、文学研究科では 4 時間未満、公共政策学研究科が 4～6 時間であった。また、10 時間以上の回答が生命環境科学研究科において一定程度見られたのに対し、文学研究科、公共政策学研究科では非常に低い割合となっており、特に公共政策学研究科では一人もいなかった。研究科の違いが在学時間に影響するか否かをより厳密に調べるため、Fisher の直接確率検定⁵を行ったところ、5%水準で統計的に有意であるという結果が得られた（両側検定・ $p=6.07e-11$ ）。この結果から、研究科による違いに目を向けて要因を探ることは可能である。しかし、在学時間そのものの長さを比較することは、良い研究生を送る上での最適な研究時間を設定し、評価することと必ずしも同義ではない。それぞれの研究科において定められたカリキュラム、求められる作業は異なるし、研究領域ごとに必要とさ

⁵ Fisher の直接確率検定は、標本数の少ないカテゴリーを含むクロス集計表において、各カテゴリー間が独立であるか否かを確認するための統計的検定の手法である。

れる適切な時間量を割いて、適切な研究成果を生み出しているのであれば問題はない。そもそも異なる研究領域を比較すること自体が適切ではないのかもしれない。とは言え、同じ大学院生という身分の中で、在学時間の違いが、後述するアルバイト等を含めた大学院生活に大きく影響するであろうことも容易に推測されることへの注意は必要であろう。

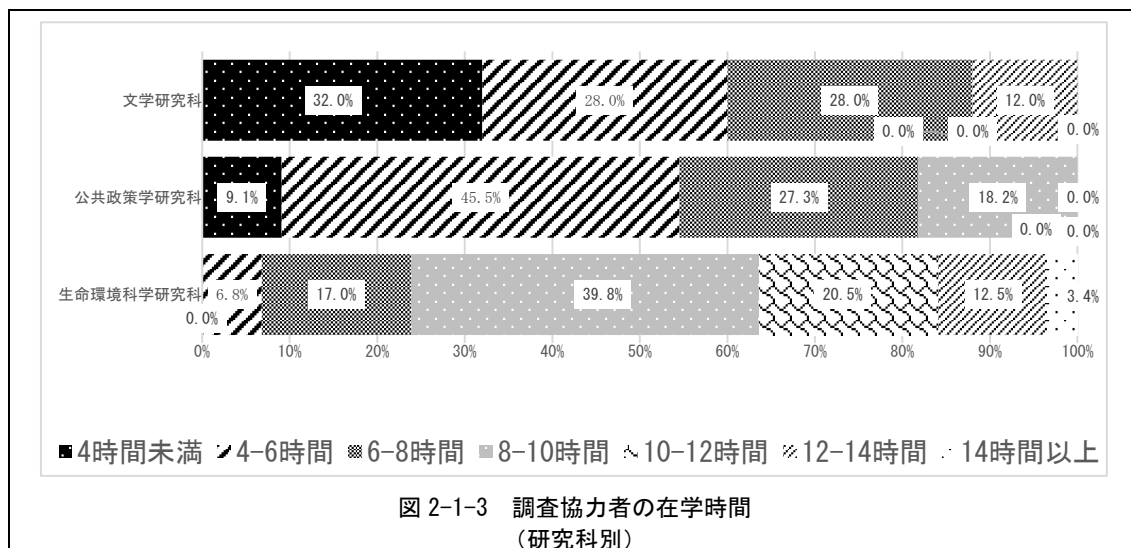
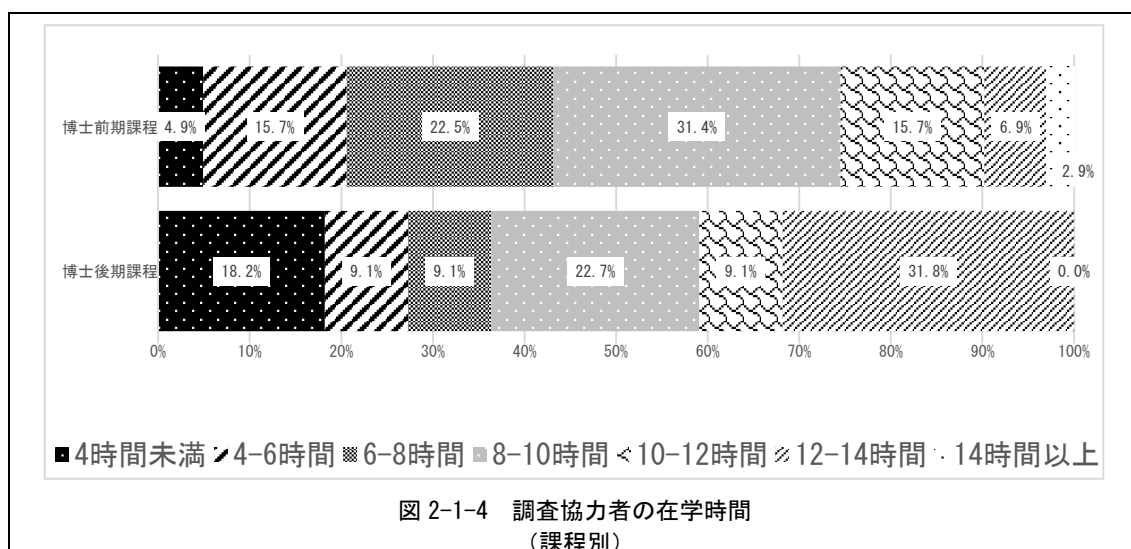


図 2-1-4 を見ると、博士前期課程、博士後期課程のいずれも中央値は 8～10 時間となっていたが、博士後期課程の方では、4 時間未満と 12～14 時間の割合が非常に高くなっていた。博士前期課程と比較すると、博士後期課程では研究内容や研究活動に対する自らの裁量の範囲がより広がるために、あるいは学外での研究報告等の様々な活動に従事する機会が増えるため在学時間がより大きく変動する、といった理由が考えられる。



(2) アルバイト時間

図 2-2-1 は調査協力者の 1 週間あたりの平均アルバイト時間を表したものである。これを見ると、調査協力者の約 4 分の 3 がアルバイトをしていることが分かる。中央値が 1～6 時間で、週に 12 時間以内と回答した割合が半数以上を占めている。図 2-2-2 は男女別に比較したものであるが、男女で大きな違いは見られなかった。

この調査結果からは、職種は明らかになっていない他、週に何日働いているのか、1 日に何時間働いているのか、といった働き方の手掛かりを明らかにすることはできない。また、この結果からアルバイト時間が非常に長いとまでいった印象は受けないが、適切な時間量であるか否かは、大学院生の本分である学業・研究活動を阻害するか否かの点から考えねばならない。時間的・体力的・金銭的に適切であるか否かを総合的に捉え、適切な評価軸を定めていく作業が今後必要となるだろう。また、収入・生計の維持をいかにするかと考えたとき、アルバイト以外には奨学金や親からの仕送り等が考えられる。それぞれは将来の返済であったり、現在の親の負担であったり、必ずしも大学院生の負担を軽くするものとして手放しで歓迎できるものではない。その点からも、大学院生の研究生生活の質を総体的にいかに高めるかということ、将来的な生活設計まで視野に入れるなど、幅広い視野から捉え直していく必要があるだろう。

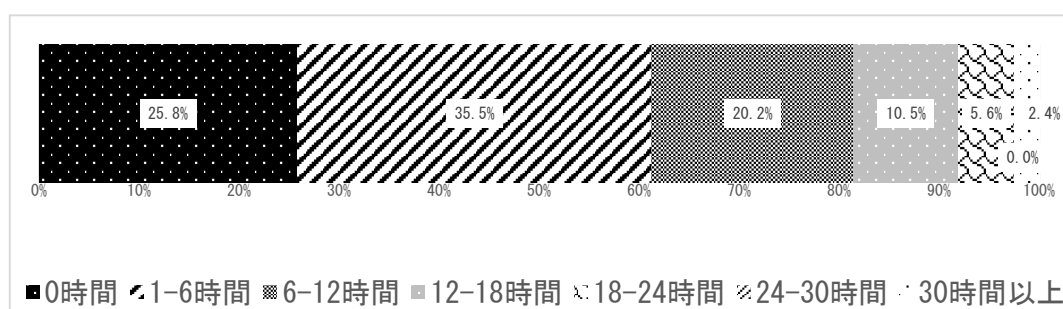


図 2-2-1 調査協力者のアルバイト時間

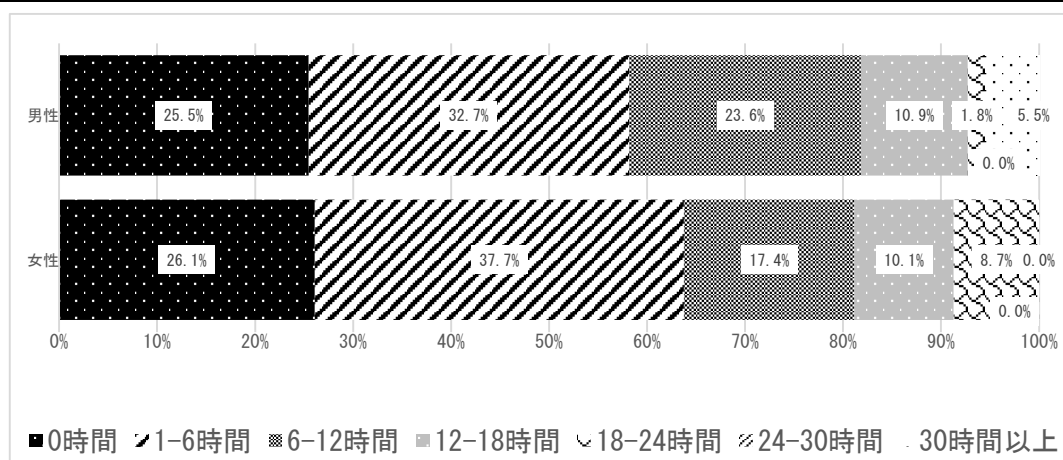


図 2-2-2 調査協力者のアルバイト時間
(男女別)

図 2-2-3 は、研究科ごとに平均アルバイト時間を比較したものである。いずれも 1～6 時間、6～12 時間の回答割合が高くなっていたが、生命環境科学研究科では他の 2 研究科以上に、アルバイトをしていない者の割合が高くなっていた。これは平均在学時間に影響しているものと考えられるため、Fisher の直接確率検定を行ったところ、統計的に有意な結果は得られなかった（両側検定・ $p=0.215$ ）。この結果から、グラフからは研究科による違いが感じ取れるが、統計検定にその結果が現れなかったということは、そもそも研究科による違いが想定され得ない、あるいは研究科による違いもあるが、大学院生個人の事情による要因に左右するためにその影響が打ち消される、といったことが推測される。

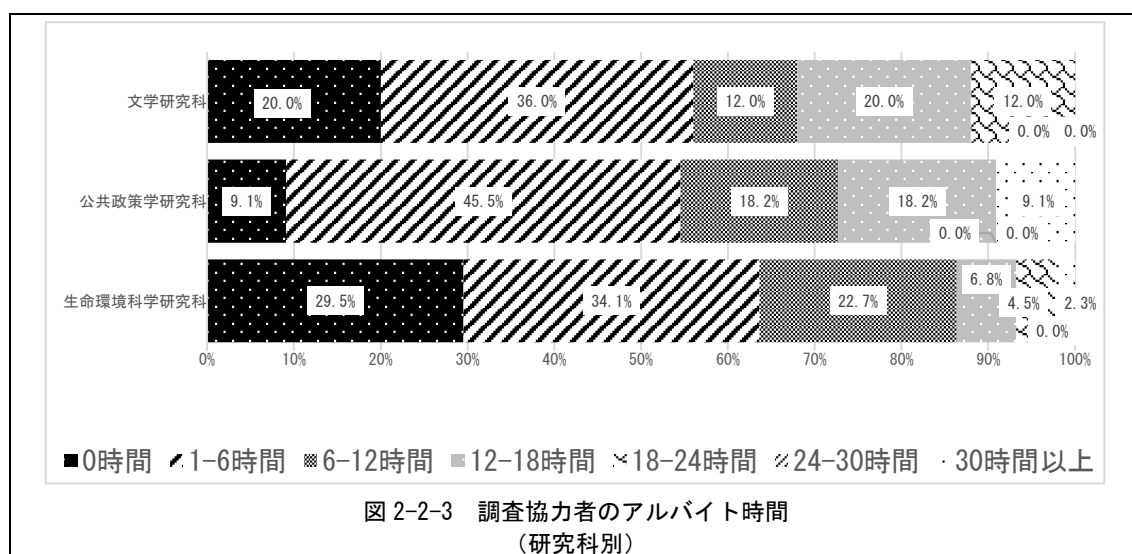
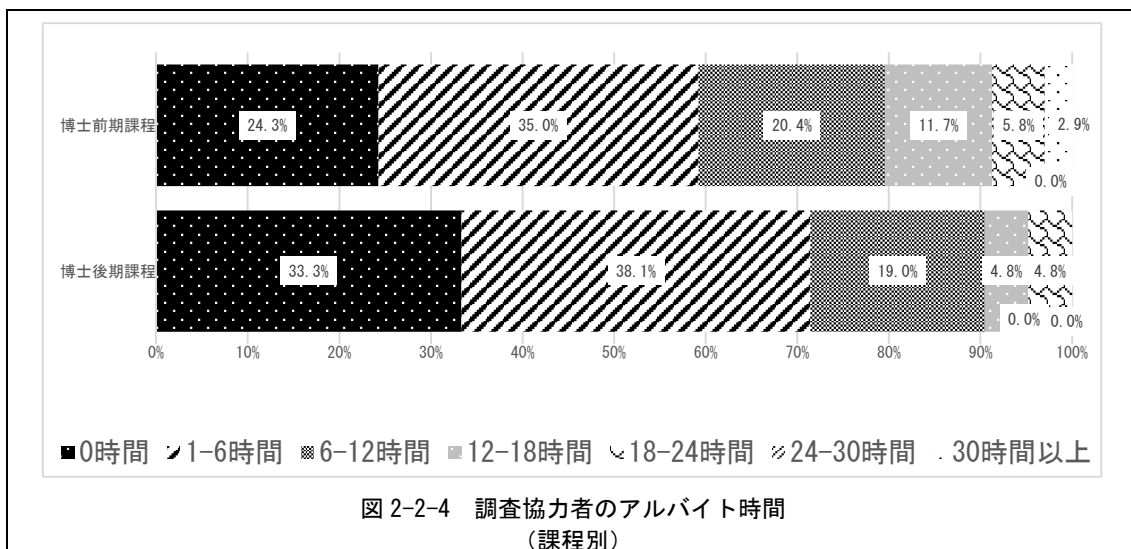


図 2-2-4 は、課程によって平均アルバイト時間を比較したものである。こちらはあまり大きな違いが見られなかったが、アルバイトをしていない者の割合が、博士後期課程の方がわずかに高くなっていた。研究科による違いと同様に、平均在学時間の違いが直接的にアルバイト時間に影響していかないことが推測される。一方で、指導教員の補助として学生指導にあたり、その他 TA・RA としてアルバイトをしていたりする者もいるだろう。これを在学時間とカウントしていると整理が難しくはなるが、アルバイトの必要性があるにも拘らず、在学時間の長さ故にアルバイトができないのであれば、その点への支援は必要となる。その意味では、研究科の違い、また課程の違いを考慮した上で、こういった研究生生活のスタイルであるかといった、より中身に踏み込んで追加調査・分析を行う必要があるのではないだろうか。



3. 研究生活の状況

(1) 進学理由

本調査項目では、予め課程ごとに設問を分けて尋ねている。まずは博士前期課程の調査協力者の回答について考えていきたい。

表 3-1-1 は博士前期課程進学を選んだ理由の回答状況を一覧にしたものである⁶。これを見ると、研究志向を有して博士前期課程に進学した割合が高いことが分かる。専門領域（テーマ）を深めたいと思う者の割合が最も、かつ極めて高いが、専門領域（テーマ）以外への学習意欲（研究志向）が高いことも同様に見て取れる。しかし、研究志向の高さに反して、研究職を志向する者の割合は低くなっている。これは、研究職以外のキャリア志向を有しているとも考えられるが、またあるいは博士前期課程であることから将来の進路自体への意識がまだ弱いことも理由として考えられる。そして、就職志向を有している者の割合が、「ややあてはまる」まで含めてもあまり高くないことが分かる。より詳しく見ると、大学院進学が将来の就職に活かされると考えている者の割合も低いが、資格取得を考えている者の割合も極めて低くなっている。これは、大学院での学びを資格取得のための学びとを別物として理解しているためという様にも思えるが、求める資格の内容やレベルによってそれは異なる。それよりもむしろ、本学大学院での学びに特化して考えたとき、資格取得のための場として期待されていない、もしくはそもそもなり得ない（想定されていない）に過ぎないと考えの方が妥当ではないだろうか。続いて、先延ばしのために博士前期課程への進学を決意した者の割合は決して高くないように思われる。学部卒業時点で働きたくなかったという回答にややバラつきが見られることはやや気になる点ではあるが、学部卒業時点での就職（活動）失敗を経験した者の割合はほとんど無いのではないかとと思われる。最後に、性別考慮を理由とする博士前期課程への進学を志向した者の割合は極めて低いが、「どちらともい

⁶ 各設問の分類は、本調査設計を行う際に参考にした「大学院生の現状と支援ニーズ調査報告書」（早稲田大学女性研究者支援総合研究所 2007）に倣っている。

えない」と回答した者が4分の1超の割合となっており、何らかの悩みや迷いを抱いていた／る可能性は否定できず、その点に注意は必要であろう。

表 3-1-1 博士前期課程進学を選んだ理由

	n	とても あてはまる	やや あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	全く あてはまらない
研究志向	研究者（大学教員を含む）になりたいから	17 (16.8%)	32 (31.7%)	11 (10.9%)	15 (14.9%)	26 (25.7%)
	専門領域（テーマ）をより深めたいから	49 (47.6%)	43 (41.7%)	7 (6.8%)	1 (1.0%)	3 (2.9%)
	専門領域（テーマ）以外を含めてもっと勉強したかったから	30 (29.1%)	43 (41.7%)	18 (17.5%)	6 (5.8%)	6 (5.8%)
就職志向	就職に有利だから	7 (6.8%)	29 (28.2%)	31 (30.1%)	21 (20.4%)	15 (14.6%)
	在学中に資格試験等をめざしたいから	6 (5.8%)	10 (9.7%)	19 (18.4%)	25 (24.3%)	43 (41.7%)
	在学中に就職活動をしたから	10 (9.7%)	28 (27.2%)	21 (20.4%)	18 (17.5%)	26 (25.2%)
先延ばし	学部卒業時に希望する就職先がなかった、入れなかったか	3 (2.9%)	11 (10.7%)	7 (6.8%)	12 (11.7%)	70 (68.0%)
	学部卒業時にまだ働きたくないから	11 (10.8%)	23 (22.5%)	19 (18.6%)	14 (13.7%)	35 (34.3%)
性別考慮	大学院では性別に関係なく能力を発揮できそうだから	3 (2.9%)	10 (9.7%)	28 (27.2%)	20 (19.4%)	42 (40.8%)

表 3-1-2 は博士前期課程進学を選んだ理由の回答状況を男女別に整理したものである。これらの中でFisherの直接確率検定（両側検定）を行ったところ、統計的に有意な結果が得られなかった（5%水準）。統計的な有意差として表れてはいないが、男性の方が「どちらともいえない」と回答した者の割合が高くなっているという傾向が見られた。

表 3-1-2 博士前期課程進学を選んだ理由（男女別・％）

		とても あてはまる	やや あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	全く あてはまらない
研究志向	研究者（大学教員を含む）になりたいから	男性 16.7%	27.1%	18.8%	14.6%	22.9%
		女性 17.0%	35.8%	3.8%	15.1%	28.3%
	専門領域（テーマ）をより深めたいから	男性 43.8%	43.8%	8.3%	0.0%	4.2%
		女性 50.9%	40.0%	5.5%	1.8%	1.8%
	専門領域（テーマ）以外を含めてもっと勉強したかったから	男性 22.9%	41.7%	25.0%	4.2%	6.3%
就職志向		女性 34.5%	41.8%	10.9%	7.3%	5.5%
	就職に有利だから	男性 10.4%	31.3%	27.1%	22.9%	8.3%
		女性 3.6%	25.5%	32.7%	18.2%	20.0%
	在学中に資格試験等をめざしたいから	男性 6.3%	8.3%	22.9%	18.8%	43.8%
		女性 5.5%	10.9%	14.5%	29.1%	40.0%
先延ばし	在学中に就職活動をしたから	男性 12.5%	27.1%	22.9%	12.5%	25.0%
		女性 7.3%	27.3%	18.2%	21.8%	25.5%
	学部卒業時に希望する就職先がなかった、入れなかったか	男性 2.1%	8.3%	8.3%	14.6%	66.7%
		女性 3.6%	12.7%	5.5%	9.1%	69.1%
	学部卒業時にまだ働きたくないから	男性 12.5%	25.0%	20.8%	10.4%	31.3%
性別考慮		女性 9.3%	20.4%	16.7%	16.7%	37.0%
	大学院では性別に関係なく能力を発揮できそうだから	男性 2.1%	6.3%	27.1%	16.7%	47.9%
		女性 3.6%	12.7%	27.3%	21.8%	34.5%

表 3-1-3 は博士前期課程進学を選んだ理由の回答状況を研究科別に整理したものである。これらの中で Fisher の直接確率検定（両側検定）を行ったところ、「就職に有利だから」という項目において統計的に有意な結果が得られた（ $p=0.043・5\%$ 水準）。生命環境科学研究科で「あてはまる」という回答割合が高く、文系の 2 研究科ではその逆となっているが、理系にとって大学院進学が、研究職志向のみならず、企業への就職に対しても有利に働くという現状を反映しているものと考えられる。

表 3-1-3 博士前期課程進学を選んだ理由（研究科別・％）

			とても あてはまる	やや あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	全く あてはまらない
研究志向	研究者（大学教員を含む）に なりたいたから	文学	13.3%	46.7%	0.0%	6.7%	33.3%
		公共	30.0%	50.0%	0.0%	10.0%	10.0%
		生命	15.8%	26.3%	14.5%	17.1%	26.3%
	専門領域（テーマ）をより深め たいから	文学	80.0%	6.7%	6.7%	0.0%	6.7%
		公共	50.0%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%
		生命	41.0%	47.4%	7.7%	1.3%	2.6%
	専門領域（テーマ）以外を含め てもっと勉強したかったから	文学	40.0%	33.3%	13.3%	6.7%	6.7%
		公共	30.0%	40.0%	10.0%	10.0%	10.0%
		生命	26.9%	43.6%	19.2%	5.1%	5.1%
就職志向	就職に有利だから	文学	6.7%	26.7%	6.7%	20.0%	40.0%
		公共	0.0%	20.0%	20.0%	40.0%	20.0%
		生命	7.7%	29.5%	35.9%	17.9%	9.0%
	在学中に資格試験等をめざし たいから	文学	13.3%	20.0%	13.3%	20.0%	33.3%
		公共	10.0%	0.0%	10.0%	30.0%	50.0%
		生命	3.8%	9.0%	20.5%	24.4%	42.3%
	在学中に就職活動をしたいた から	文学	6.7%	33.3%	13.3%	26.7%	20.0%
		公共	10.0%	0.0%	30.0%	30.0%	30.0%
		生命	10.3%	29.5%	20.5%	14.1%	25.6%
先延ばし	学部卒業時に希望する就職先 がなかった、入れなかったか ら	文学	0.0%	6.7%	13.3%	13.3%	66.7%
		公共	0.0%	10.0%	0.0%	10.0%	80.0%
		生命	3.8%	11.5%	6.4%	11.5%	66.7%
	学部卒業時にまだ働きたくな かったから	文学	0.0%	26.7%	20.0%	13.3%	40.0%
		公共	10.0%	0.0%	0.0%	40.0%	50.0%
		生命	13.0%	24.7%	20.8%	10.4%	31.2%
性別考慮	大学院では性別に関係なく能 力を発揮できそうだから	文学	6.7%	20.0%	26.7%	6.7%	40.0%
		公共	0.0%	20.0%	40.0%	0.0%	40.0%
		生命	2.6%	6.4%	25.6%	24.4%	41.0%

※文学：文学研究科／公共：公共政策学研究科／生命：生命環境科学研究科

図 3-1-1～図 3-1-6 は博士前期課程修了後に希望している進路について尋ねた結果を、全体、男女別、研究科別に整理したものである。全体では研究職を志望する者の割合が最も高く、全体の 48.3% を占めた。次いで非研究職の割合が高く（30.2%）、少し差が開いて博士後期課程への進学（10.3%）、小・中・高・専門学校教員（6.9%）、その他（4.3%）の順となった。母数の小さい文学研究科は全く異なる状況を示したが、一方で同じく母数の小さい公共政策学研究科については他のカテゴリーとほぼ同じ傾向を示しており、文学研究科を除くカテゴリーにおいて同様の順位傾向を示していると言って良いだろう。

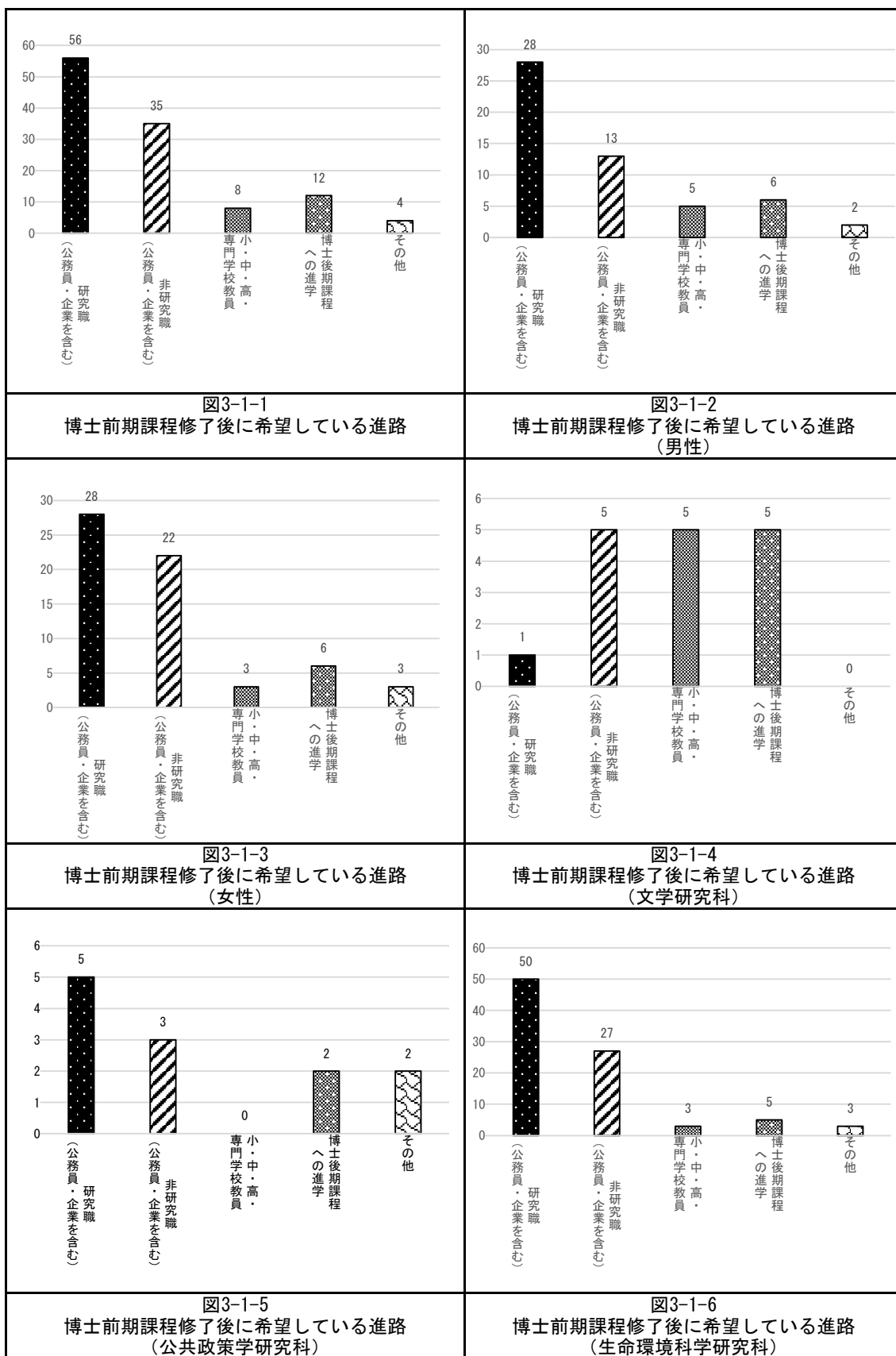


表 3-1-4 は博士後期課程進学を選んだ理由の回答状況を一覧にしたものである。これを見ると、研究志向を有して博士後期課程に進学した割合が極めて高いことが分かる。すなわち、博士前期課程と比較して研究者になりたい、専門領域をより深めたいと考える者の割合が極めて高く、明確な意図を有して進学していると考えられる。就職志向を有している者の割合が低いことから、研究者になりたいという明確な意思を持って博士後期課程に進学していると考えられる。博士前期課程修了では希望する職につくことはできないと考える（ていた）者の割合が高いが、博士後期課程への進学を研究者になるための要件とは必ずしもしないこと、一方で実態としては博士後期課程への進学（を通じて博士号を取得すること）が研究者になるためのキャリアパスとして一般的と考えられることから、上述の分析と矛盾するものではなく、むしろ裏打ちするものであると言えよう。先延ばしのために博士後期課程への進学を決意した者の割合は低くなっている。性別考慮を理由とする博士後期課程への進学を志向した者の割合は極めて低いが、「どちらともいえない」と回答した者が45%となっており、博士前期課程の回答結果（27%）よりもさらに高くなっていた。

表 3-1-4 博士後期課程進学を選んだ理由

		n	とても あてはまる	やや あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	全く あてはまらない
研究志向	研究者（大学教員を含む）に なりたいたから	22	16 (72. 7%)	4 (18. 2%)	1 (4. 5%)	0 (0. 0%)	1 (4. 5%)
		22	18 (81. 8%)	4 (18. 2%)	0 (0. 0%)	0 (0. 0%)	0 (0. 0%)
	専門領域（テーマ）をより深め たいから	22	8 (36. 4%)	12 (54. 5%)	1 (4. 5%)	1 (4. 5%)	0 (0. 0%)
		22					
就職志向	就職に有利だから	22	1 (4. 5%)	2 (9. 1%)	3 (13. 6%)	5 (22. 7%)	11 (50. 0%)
		22	0 (0. 0%)	1 (4. 5%)	3 (13. 6%)	2 (9. 1%)	16 (72. 7%)
	在学中に資格試験等をめざし たいから	22	0 (0. 0%)	2 (9. 1%)	3 (13. 6%)	7 (31. 8%)	10 (45. 5%)
		22					
先延ばし	学部卒業時に希望する就職先 がなかった、入れなかったか	22	0 (0. 0%)	3 (13. 6%)	1 (4. 5%)	3 (13. 6%)	15 (68. 2%)
		22	1 (4. 5%)	6 (27. 3%)	5 (22. 7%)	1 (4. 5%)	9 (40. 9%)
	学部卒業時にまだ働きたくな かったから	22					
		22					
性別考慮	大学院では性別に関係なく能 力を発揮できそうだから	22	0 (0. 0%)	1 (4. 5%)	10 (45. 5%)	4 (18. 2%)	7 (31. 8%)
		22					

表 3-1-5 は博士後期課程進学を選んだ理由の回答状況を男女別に整理したものである。これらの中で Fisher の直接確率検定（両側検定）を行ったところ、「専門領域（テーマ）をより深めたいから」という項目に対して統計的に有意な結果が得られた（ $p=0.077 \cdot 5\%$ 水準）。全員が「とてもあてはまる」、「ややあてはまる」のいずれかを選択していること、その内「とてもあてはまる」を選択した者の割合が圧倒的に高いことから、博士後期課程は専門性を深めるための場であるという共通理解がなされていると考えて良いだろう。その中で女性の割合が極めて高くなっているが、女性にとっての博士後期課程進学が男性と比較して非常

に重要な決断を必要としているものであり、その様にフィルターがかけられている事実が回答結果に反映されていると考えられる。

表 3-1-5 博士後期課程進学を選んだ理由(男女別・%)

			とても あてはまる	やや あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	全く あてはまらない
研究志向	研究者(大学教員を含む)になりたいから	男性	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
		女性	60.0%	26.7%	6.7%	0.0%	6.7%
	専門領域(テーマ)をより深めたいから	男性	57.1%	42.9%	0.0%	0.0%	0.0%
		女性	93.3%	6.7%	0.0%	0.0%	0.0%
	専門領域(テーマ)以外を含めてもっと勉強したかったから	男性	28.6%	57.1%	14.3%	0.0%	0.0%
		女性	40.0%	53.3%	0.0%	6.7%	0.0%
就職志向	就職に有利だから	男性	0.0%	0.0%	14.3%	28.6%	57.1%
		女性	6.7%	13.3%	13.3%	20.0%	46.7%
	在学中に資格試験等をめざしたいから	男性	0.0%	0.0%	14.3%	14.3%	71.4%
		女性	0.0%	6.7%	13.3%	6.7%	73.3%
	在学中に就職活動をしたかったから	男性	0.0%	0.0%	14.3%	57.1%	28.6%
		女性	0.0%	13.3%	13.3%	20.0%	53.3%
先延ばし	学部卒業時に希望する就職先がなかった、入れなかったか	男性	0.0%	28.6%	0.0%	14.3%	57.1%
		女性	0.0%	6.7%	6.7%	13.3%	73.3%
	学部卒業時にまだ働きたくなかったから	男性	0.0%	28.6%	28.6%	14.3%	28.6%
		女性	6.7%	26.7%	20.0%	0.0%	46.7%
性別考慮	大学院では性別に関係なく能力を発揮できそうだから	男性	0.0%	0.0%	28.6%	28.6%	42.9%
		女性	0.0%	6.7%	53.3%	13.3%	26.7%

表 3-1-6 は博士後期課程進学を選んだ理由の回答状況を研究科別に整理したものである。これらの中で Fisher の直接確率検定(両側検定)を行ったところ、「専門領域(テーマ)以外を含めてもっと勉強したかったから」($p=0.029$)、「大学院では性別に関係なく能力を発揮できそうだから」($p=0.022$) という 2 項目に対して統計的に有意な結果が得られた(5%水準)。前者については、専門領域以外にも幅広く学習をしたいと考えているのか、専門領域の学びを深めるために周辺領域を学習したいと考えているのか、といった違いがいかに関答に反映されているのかについての検討は必要であろう。確かに、研究者になりたい者の割合が極めて高い事情を考慮すると、専門領域に特化した学びを求めて博士後期課程への進学を考えた者の割合が高くなると考えるのが妥当であると思われる。しかし、研究者としてのキャリアパスにおいては常勤・非常勤を問わず専門領域以外の指導を行う可能性が非常に高く、かつそのことが自らのキャリア形成にプラスに働くこと、あるいは自らの専門領域における研究の質を高めるために他の領域からヒントを得ること、等の合理的理由は大いに考えられる余地がある。後者については、男女別に違いが得られなかった点は興味深い。確かに全体的な母数が小さいことには注意が必要である一方、キャリア上の男女の違い(不利益とも言い換えられるだろう)が研究領域によって大きく異なっている現状を反映しているとも考えられる。

表 3-1-6 博士後期課程進学を選んだ理由(研究科別・%)

		とても あてはまる	やや あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	全く あてはまらない
研究志向	研究者(大学教員を含む)になりたいから	文学	90.0%	0.0%	0.0%	10.0%
		公共	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%
		生命	54.5%	36.4%	0.0%	0.0%
	専門領域(テーマ)をより深めたいから	文学	90.0%	10.0%	0.0%	0.0%
		公共	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%
		生命	72.7%	27.3%	0.0%	0.0%
	専門領域(テーマ)以外を含めてもっと勉強したかったから	文学	60.0%	20.0%	10.0%	0.0%
		公共	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
		生命	18.2%	81.8%	0.0%	0.0%
就職志向	就職に有利だから	文学	0.0%	10.0%	10.0%	70.0%
		公共	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
		生命	9.1%	0.0%	36.4%	36.4%
	在学中に資格試験等をめざしたいから	文学	0.0%	0.0%	20.0%	80.0%
		公共	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%
		生命	0.0%	9.1%	9.1%	72.7%
	在学中に就職活動をしたいたから	文学	0.0%	10.0%	20.0%	40.0%
		公共	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%
		生命	0.0%	9.1%	36.4%	54.5%
先延ばし	学部卒業時に希望する就職先がなかった、入れなかったから	文学	0.0%	20.0%	20.0%	50.0%
		公共	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%
		生命	0.0%	9.1%	0.0%	90.9%
	学部卒業時にまだ働きたくなかったから	文学	10.0%	30.0%	10.0%	40.0%
		公共	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
		生命	0.0%	18.2%	36.4%	45.5%
性別考慮	大学院では性別に関係なく能力を発揮できそうだから	文学	0.0%	0.0%	30.0%	10.0%
		公共	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
		生命	0.0%	0.0%	36.4%	54.5%

※文学：文学研究科／公共：公共政策学研究科／生命：生命環境科学研究科

(2) 研究環境

表 3-2-1 は、京都府立大学の研究環境について尋ねた結果を整理したものである。これを概観すると、「あてはまる」という回答群が平均して約 66%を占めていることから、概ね現状の研究環境を肯定的に捉えている様の一見思われる。しかしよく見ると、「研究室や機器等の設備面における研究環境が整っている」という設問については、「あてはまる」という回答群が 40%、「どちらともいえない」という回答が 26%、「あてはまらない」という回答群が 34%と、非常に均衡している。さらに、「学内に、研究や家庭を両立している良きモデルがいる」という設問については、「あてはまる」という回答群と「あてはまらない」という回答群が 36～37%とほぼ同数である。残りの設問については「あてはまる」という回答群がすべて 70%を超えている。その中でも、割合の高い 2 つの設問については「とてもあてはまる」が「ややあてはまる」を上回り、残り 2 つの設問についてはその逆となっている。以上のことから、回答者はかなり具体的に自らの研究環境に対する評価を行っていることが窺われる。

表 3-2-1 京都府立大学の研究環境

	n	とても あてはまる	やや あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	全く あてはまらない
就学時間が自分の希望に合っている	123	35 (28.5%)	54 (43.9%)	24 (19.5%)	6 (4.9%)	4 (3.3%)
研究をするうえで適切な指導を受けることができる	123	60 (48.8%)	50 (40.7%)	10 (8.1%)	3 (2.4%)	0 (0.0%)
性別に関係なく、自分の能力を発揮できる環境にある	123	52 (42.3%)	45 (36.6%)	19 (15.4%)	6 (4.9%)	1 (0.8%)
研究室や機器等の設備面における研究環境が整っている	123	14 (11.4%)	36 (29.3%)	32 (26.0%)	31 (25.2%)	10 (8.1%)
学内に、研究や進路について相談できる人がいる	123	31 (25.2%)	63 (51.2%)	11 (8.9%)	13 (10.6%)	5 (4.1%)
学内に、研究や家庭を両立している良きモデルがいる	122	20 (16.4%)	26 (21.3%)	32 (26.2%)	29 (23.8%)	15 (12.3%)

表 3-2-2 は、京都府立大学の研究環境について尋ねた結果を男女別に見たものである。これらについて Fisher の直接確率検定を行ったところ、統計的に有意な結果が得られなかった（5%水準・両側検定）。項目により若干の差異はあるものの、概ね傾向は一致していると見て良いだろう。

表 3-2-2 京都府立大学の研究環境（男女別・％）

		とても あてはまる	やや あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	全く あてはまらない
就学時間が自分の希望に合っている	男性	35.2%	38.9%	16.7%	5.6%	3.7%
	女性	23.2%	47.8%	21.7%	4.3%	2.9%
研究をするうえで適切な指導を受けることができる	男性	48.1%	40.7%	5.6%	5.6%	0.0%
	女性	49.3%	40.6%	10.1%	0.0%	0.0%
性別に関係なく、自分の能力を発揮できる環境にある	男性	38.9%	37.0%	18.5%	3.7%	1.9%
	女性	44.9%	36.2%	13.0%	5.8%	0.0%
研究室や機器等の設備面における研究環境が整っている	男性	9.3%	35.2%	25.9%	20.4%	9.3%
	女性	13.0%	24.6%	26.1%	29.0%	7.2%
学内に、研究や進路について相談できる人がいる	男性	31.5%	48.1%	7.4%	9.3%	3.7%
	女性	20.3%	53.6%	10.1%	11.6%	4.3%
学内に、研究や家庭を両立している良きモデルがいる	男性	15.1%	18.9%	30.2%	22.6%	13.2%
	女性	17.4%	23.2%	23.2%	24.6%	11.6%

表 3-2-3 は、京都府立大学の研究環境について尋ねた結果を研究科別に見たものである。これらについて Fisher の直接確率検定（両側検定）を行ったところ、「研究室や機器等の設備面における研究環境が整っている」（ $p=0.020$ ）、「学内に、研究や進路について相談できる人がいる」（ $p=0.006$ ）の 2 項目について統計的に有意な結果が得られた（5%水準）。前者について、母数が小さいことに注意は必要だが、文学研究科において「あまりあてはまらない」に加えて「全くあてはまらない」と回答した者の割合も 26.1%と非常に高くなっている。指導についての満足度が相対的に高いことと重ね合わせると、文学研究科の院生は、何がやりたいのか／何を学びたいのかという内容がそれぞれ具体的になっているからではないかと考えられる。また、こちらも母数が小さいことに注意は必要だが、公共政策学研究科では

「どちらともいえない」と回答した者が 63.6%と非常に高く、「ややあてはまる」、あるいは「あまりあてはまらない」と回答した者の割合がそれぞれ 18.2%ずつとなっており、自ら評価を下し難い研究環境なのだと考えられる。後者については、研究テーマや研究方法がどの程度定まっているのかという違いが影響している様に思われる。

表 3-2-3 京都市立大学の研究環境（研究科別・％）

		とても あてはまる	やや あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	全く あてはまらない
就学時間が自分の希望に合っている	文学	30.4%	43.5%	21.7%	0.0%	4.3%
	公共	18.2%	45.5%	27.3%	0.0%	9.1%
	生命	29.2%	43.8%	18.0%	6.7%	2.2%
研究をするうえで適切な指導を受けることができる	文学	65.2%	26.1%	8.7%	0.0%	0.0%
	公共	45.5%	54.5%	0.0%	0.0%	0.0%
	生命	44.9%	42.7%	9.0%	3.4%	0.0%
性別に関係なく、自分の能力を発揮できる環境にある	文学	34.8%	39.1%	17.4%	8.7%	0.0%
	公共	27.3%	36.4%	36.4%	0.0%	0.0%
	生命	46.1%	36.0%	12.4%	4.5%	1.1%
研究室や機器等の設備面における研究環境が整っている	文学	4.3%	26.1%	17.4%	26.1%	26.1%
	公共	0.0%	18.2%	63.6%	18.2%	0.0%
	生命	14.6%	31.5%	23.6%	25.8%	4.5%
学内に、研究や進路について相談できる人がいる	文学	17.4%	39.1%	4.3%	26.1%	13.0%
	公共	0.0%	90.9%	0.0%	9.1%	0.0%
	生命	30.3%	49.4%	11.2%	6.7%	2.2%
学内に、研究や家庭を両立している良きモデルがいる	文学	17.4%	17.4%	26.1%	21.7%	17.4%
	公共	9.1%	27.3%	27.3%	36.4%	0.0%
	生命	17.0%	21.6%	26.1%	22.7%	12.5%

※文学：文学研究科／公共：公共政策学研究科／生命：生命環境科学研究科

表 3-2-4 は、研究生活上の困りごと・悩みについて整理したものである。研究生活において困っていること・悩んでいることについて、「悩んでいる」という回答群の割合が高かったのは、順に「研究（論文）の進め方」、「希望進路（就職先）につけるかわからないこと」、「研究における自分の適性」、「経済的なこと」、「希望進路（就職先）が明確にならないこと」であった。大カテゴリーで見ると、「悩んでいる」という回答群の割合が高い順に「経済面」、「進路」、「研究」、「健康面」、「人間関係」となった。なお、本設問においても、「大学院生の現状と支援ニーズ調査報告書」（早稲田大学女性研究者支援総合研究所 2007）に倣って「指導教官や研究室での人間関係」を「研究」にカテゴライズしているが、この設問を「人間関係」に移すと、残り 2 つの設問における「悩んでいる」という回答群の平均値は 61% となり、最も高くなった。個々の設問ごとにみると、「悩んでいる」という回答群の割合が高い順に、「研究（論文）の進め方」、「希望進路（就職先）につけるかわからないこと」、「研究における自分の適性」、「経済的なこと」、「希望進路（就職先）が明確にならないこと」となった。「現在」の困っていること・悩んでいることを尋ねる調査ではあるが、総じて「短期的」な、「現在」の悩みが多いことが伺われた。「人間関係」については「指導教官や研究室での人間関係」を含んでもなお、「悩んでいる」という回答群の割合は低い結果となった。

表 3-2-4 研究生活上の困りごと・悩み

			n	とても 悩んでいる	やや 悩んでいる	どちらとも いえない	あまり 悩んでいない	全く 悩んでいない
研究	指導教官や研究室内での人間 関係	125	6	15	19	46	39	
			(4. 8%)	(12. 0%)	(15. 2%)	(36. 8%)	(31. 2%)	
	研究(論文)の進め方	124	28	52	21	15	8	
			(22. 6%)	(41. 9%)	(16. 9%)	(12. 1%)	(6. 5%)	
研究における自分の適性	125	20	53	25	13	14		
		(16. 0%)	(42. 4%)	(20. 0%)	(10. 4%)	(11. 2%)		
進路	希望進路(就職先)につけるか わからないこと	125	40	39	17	15	14	
			(32. 0%)	(31. 2%)	(13. 6%)	(12. 0%)	(11. 2%)	
	希望進路(就職先)が明確にな らないこと	125	27	43	17	21	17	
			(21. 6%)	(34. 4%)	(13. 6%)	(16. 8%)	(13. 6%)	
研究と結婚・育児等を含めた 将来のライフプラン	125	15	34	32	27	17		
		(12. 0%)	(27. 2%)	(25. 6%)	(21. 6%)	(13. 6%)		
経済面	経済的なこと	124	24	47	17	22	14	
			(19. 4%)	(37. 9%)	(13. 7%)	(17. 7%)	(11. 3%)	
健康面	健康面	125	9	28	20	47	21	
			(7. 2%)	(22. 4%)	(16. 0%)	(37. 6%)	(16. 8%)	
人間関係	家族の理解が少ないこと	125	3	7	17	36	62	
			(2. 4%)	(5. 6%)	(13. 6%)	(28. 8%)	(49. 6%)	

表 3-2-5 は、研究生活上の困りごと・悩みについて男女別に整理したものである。これらについて Fisher の直接確率検定（両側検定）を行ったところ、「健康面」(p=0.022) について統計的に有意な結果が得られた（5%水準）。このことから、男性の方が女性よりも「悩みや困りごとがあった場合には深刻に受け止める」のではないかと、という推測ができる。

表 3-2-5 研究生活上の困りごと・悩み（男女別・%）

			とても 悩んでいる	やや 悩んでいる	どちらとも いえない	あまり 悩んでいない	全く 悩んでいない
研究	指導教官や研究室での人間 関係	男性	3.6%	14.5%	14.5%	36.4%	30.9%
		女性	5.7%	10.0%	15.7%	37.1%	31.4%
	研究(論文)の進め方	男性	18.2%	47.3%	14.5%	14.5%	5.5%
		女性	26.1%	37.7%	18.8%	10.1%	7.2%
	研究における自分の適性	男性	14.5%	34.5%	23.6%	14.5%	12.7%
		女性	17.1%	48.6%	17.1%	7.1%	10.0%
進路	希望進路(就職先)につけるか わからないこと	男性	25.5%	32.7%	18.2%	9.1%	14.5%
		女性	37.1%	30.0%	10.0%	14.3%	8.6%
	希望進路(就職先)が明確にな らないこと	男性	16.4%	29.1%	16.4%	21.8%	16.4%
		女性	25.7%	38.6%	11.4%	12.9%	11.4%
	研究と結婚・育児等を含めた将 来のライフプラン	男性	12.7%	23.6%	23.6%	23.6%	16.4%
		女性	11.4%	30.0%	27.1%	20.0%	11.4%
経済面	経済的なこと	男性	20.4%	38.9%	14.8%	16.7%	9.3%
		女性	18.6%	37.1%	12.9%	18.6%	12.9%
健康面	健康面	男性	12.7%	12.7%	10.9%	43.6%	20.0%
		女性	2.9%	30.0%	20.0%	32.9%	14.3%
人間関係	家族の理解が少ないこと	男性	0.0%	3.6%	14.5%	27.3%	54.5%
		女性	4.3%	7.1%	12.9%	30.0%	45.7%

表 3-2-6 は、研究生活上の困りごと・悩みについて研究科別に整理したものである。これ

らについて Fisher の直接確率検定（両側検定）を行ったところ、「希望進路(就職先)が明確にならないこと」(p= 0.039)、「研究と結婚・育児等を含めた将来のライフプラン」(p=0.011)の2項目について統計的に有意な結果が得られた（5%水準）。前者について、表 3-2-3 では、文学研究科の院生は、何がやりたいのか／何を学びたいのかという内容がそれぞれ具体的にになっているからではないかと述べたが、やりたい／学びたい内容が進路・キャリアと結び付きにくい現状を示していると考えられる。後者について、生命環境科学研究科において研究職を志望する者の割合が有意に高いことを考え合わせると、企業の研究職に就くことを志望している者の割合が高い、あるいは、漠然と研究に携わりたいが研究者としてのアイデンティティを形成するには至っていない者が多いという仮説（推測）から、「結婚・育児等」についてリアリティを持って捉えられてはいないが、その選択を実現するのに大いに関わる「就職」とそれに伴う生活の安定という点における潜在的な不安要素が、本設問における研究科による差異という形で立ち現れたのではないだろうか。

表 3-2-6 研究生活上の困りごと・悩み（研究科別・%）

		とても 悩んでいる	やや 悩んでいる	どちらとも いえない	あまり 悩んでいない	全く 悩んでいない	
研究	指導教官や研究室内での人間 関係	文学	9.1%	27.3%	0.0%	63.6%	0.0%
		公共	0.0%	12.5%	25.0%	62.5%	0.0%
		生命	7.5%	16.4%	25.4%	50.7%	0.0%
	研究(論文)の進め方	文学	25.0%	45.8%	20.8%	4.2%	4.2%
		公共	27.3%	36.4%	18.2%	18.2%	0.0%
		生命	21.3%	41.6%	15.7%	13.5%	7.9%
	研究における自分の適性	文学	16.0%	52.0%	16.0%	8.0%	8.0%
		公共	18.2%	54.5%	9.1%	18.2%	0.0%
		生命	15.7%	38.2%	22.5%	10.1%	13.5%
進路	希望進路(就職先)につけるか わからないこと	文学	56.0%	12.0%	16.0%	12.0%	4.0%
		公共	27.3%	45.5%	0.0%	9.1%	18.2%
		生命	25.8%	34.8%	14.6%	12.4%	12.4%
	希望進路(就職先)が明確にな らないこと	文学	44.0%	16.0%	16.0%	20.0%	4.0%
		公共	18.2%	45.5%	0.0%	9.1%	27.3%
		生命	15.7%	38.2%	14.6%	16.9%	14.6%
	研究と結婚・育児等を含めた将 来のライフプラン	文学	32.0%	32.0%	12.0%	12.0%	12.0%
		公共	18.2%	45.5%	18.2%	18.2%	0.0%
		生命	5.6%	23.6%	30.3%	24.7%	15.7%
経済面	経済的なこと	文学	28.0%	28.0%	8.0%	32.0%	4.0%
		公共	18.2%	45.5%	27.3%	0.0%	9.1%
		生命	17.0%	39.8%	13.6%	15.9%	13.6%
健康面	健康面	文学	8.0%	24.0%	16.0%	36.0%	16.0%
		公共	0.0%	18.2%	18.2%	54.5%	9.1%
		生命	7.9%	22.5%	15.7%	36.0%	18.0%
人間関係	家族の理解が少ないこと	文学	0.0%	20.0%	4.0%	32.0%	44.0%
		公共	0.0%	0.0%	18.2%	36.4%	45.5%
		生命	3.4%	2.2%	15.7%	27.0%	51.7%

※文学：文学研究科／公共：公共政策学研究科／生命：生命環境科学研究科

(3) 相談相手

表 3-3-1 は研究生生活で困ったり悩んだりしたとき、相談相手として頼りにしている人が誰であるか尋ねた結果をまとめたものである。

「あてはまる」という回答群の割合の平均値は54%、「とてもあてはまる」と回答した者の割合の平均値は21%という結果となった。また、「あてはまる」という回答群の割合の中央値は67%、「とてもあてはまる」と回答した者の割合の中央値は24%という結果となり、それぞれ平均値よりも高くなっていた。この理由として、「家族（親・きょうだい）」、「指導教員以外の教員」を相談相手として頼りにする割合が他と比べて若干低く、そこからさらに大きく離れて「学生相談室」を相談相手として頼りにする割合が非常に低くなっているためである。

本設問における「研究生生活で困ったり悩んだりしたとき」という条件設定も加味して、対象群（設問群）を整理すると、「研究との関連性」と「日常的な接触頻度」という2つのポイントが浮かび上がる。「あてはまる」という回答群において上位を占めた4つの内、「指導教員」、「研究室の仲間」、「研究科の先輩・後輩」の3つは、「研究との関連性」と「日常的な接触頻度」の両方が認められる。「友人・恋人」については「研究との関連性」を欠くため、「とてもあてはまる」と回答した者の割合ではその順位を落としたが、そもそも領域を選ばず相談相手となる「特別に親密な関係」であることが想起されるため、相談相手として頼りにする割合が高くなっていると考えられる。「指導教員以外の教員」は、マクロには専門家として大いに頼りになり得る一方で、回答者自身が「どういった研究を日常的に行っているか」ということについては知らないと考えられることから「研究との関連性」がやや低くなり、また学年やカリキュラム、研究科や研究方法によって違いがあることは考えられるが、おそらく「日常的な接触頻度」は他よりも低くなると考えられ、そのため相談相手として頼りにする割合が若干低くなったものとして考えられる。「家族（親・きょうだい）」についても「日常的な接触頻度」が高いことは容易に想定されるものの、そもそも実家／下宿の別も関係してくるであろうし、親密圏であるが故に感情が反転して相談相手たり得ないことも考えられる。「研究との関連性」について、「家族（親・きょうだい）」に専門的な内容について話すことはやはりあり得ないであろうことから、こちらも相談相手として頼りにする割合が若干低くなったものとして考えられる。

「学生相談室」について、「あてはまる」という回答群の割合が4.0%、「全くあてはまらない」と回答した者の割合が63.2%と、突出して他とかけ離れていることが分かる。回答者、すなわち本学の大学院生が学生相談室を認知しているか、という点の考慮は合わせて必要であろうが、やはり「日常的な接触頻度」を欠くことから、相談相手として頼りにする割合が低くなっていると考えられる。また、「学生相談室」とは、一般的には学生生活全般に関して開かれた相談窓口として機能することが求められていると理解して良いであろう。回答者、すなわち本学の大学院生が学生相談室をどういった存在として認識しているか、という点の考慮も合わせて必要となるが、少なくとも「研究との関連性」は考え難い。しかし、

「学生相談室」が幅広く開かれた相談窓口として機能するということは、全てが「学生相談室」で完結することは意味せず、適切な情報提供や連携機能も有している必要がある。ところで、「学生相談室」はその名称が示す通りに「相談」に特化したセクションであるから、「日常的な接触頻度」はそもそも低い想定であるべきで、その上で相談相手として頼りになることが求められるべきである。したがって、「研究との関連性」は低くとも、その存在の認知と役割の認識を高めることにより、相談相手として頼りにする割合を高めていく取り組みが必要であろう。

表 3-3-1 研究生活上の困りごと・悩みについての相談相手

	n	とても あてはまる	やや あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	全く あてはまらない
指導教員	125	40 (32.0%)	55 (44.0%)	13 (10.4%)	12 (9.6%)	5 (4.0%)
指導教員以外の教員	125	13 (10.4%)	44 (35.2%)	30 (24.0%)	23 (18.4%)	15 (12.0%)
研究室の仲間	125	39 (31.2%)	45 (36.0%)	19 (15.2%)	11 (8.8%)	11 (8.8%)
研究科の先輩・後輩	125	30 (24.0%)	54 (43.2%)	17 (13.6%)	12 (9.6%)	12 (9.6%)
家族（親・きょうだい）	125	22 (17.6%)	38 (30.4%)	23 (18.4%)	19 (15.2%)	23 (18.4%)
友人・恋人	125	34 (27.2%)	54 (43.2%)	15 (12.0%)	12 (9.6%)	10 (8.0%)
学生相談室	125	2 (1.6%)	3 (2.4%)	19 (15.2%)	22 (17.6%)	79 (63.2%)

表 3-3-2 は研究生活で困ったり悩んだりしたとき、相談相手として頼りにしている人が誰であるか尋ねた結果を男女別にまとめたものである。これらについて Fisher の直接確率検定（両側検定）を行ったところ、「研究室の仲間」（ $p=0.020$ ）という項目について統計的に有意な結果が得られた（5%水準）。これが人数や環境といった諸条件を完全に同一なものとした結果であれば、単純に「他人に相談する」という行為に対する意識や考え方の違いがそのまま性差として現れていると考えて良いであろう。しかし、人数比や扱いに対する男女の違い、将来の進路選択に関わる違い等を考慮した場合、研究生活において日常的に接し、行動を共にする「研究室の仲間」こそ、関係性において配慮を要する存在であるのかもしれない。また、ここで言う「研究室の仲間」は、設問上同性／異性を区別してはいない。その点も踏まえて、前問における問題提起と同様、その内実と合わせて解消に向けた取り組みがなされるべきであろう。

表 3-3-3 は研究生活で困ったり悩んだりしたとき、相談相手として頼りにしている人が誰であるか尋ねた結果を研究科別にまとめたものである。これらについて Fisher の直接確率検定（両側検定）を行ったところ、「研究科の先輩・後輩」（ $p=0.046$ ）という項目について統計的に有意な結果が得られた（5%水準）。「ややあてはまる」と回答した者の割合が

表 3-3-2 研究生活上の困りごと・悩みについての相談相手（男女別・％）

		とても あてはまる	やや あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	全く あてはまらない
指導教員	男性	25.5%	45.5%	10.9%	10.9%	7.3%
	女性	37.1%	42.9%	10.0%	8.6%	1.4%
指導教員以外の教員	男性	7.3%	30.9%	32.7%	12.7%	16.4%
	女性	12.9%	38.6%	17.1%	22.9%	8.6%
研究室の仲間	男性	40.0%	32.7%	7.3%	14.5%	5.5%
	女性	24.3%	38.6%	21.4%	4.3%	11.4%
研究科の先輩・後輩	男性	29.1%	45.5%	7.3%	9.1%	9.1%
	女性	20.0%	41.4%	18.6%	10.0%	10.0%
家族（親・きょうだい）	男性	14.5%	23.6%	29.1%	16.4%	16.4%
	女性	20.0%	35.7%	10.0%	14.3%	20.0%
友人・恋人	男性	25.5%	41.8%	16.4%	12.7%	3.6%
	女性	28.6%	44.3%	8.6%	7.1%	11.4%
学生相談室	男性	1.8%	3.6%	16.4%	18.2%	60.0%
	女性	1.4%	1.4%	14.3%	17.1%	65.7%

表 3-3-3 研究生活上の困りごと・悩みについての相談相手（研究科別・％）

		とても あてはまる	やや あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	全く あてはまらない
指導教員	文学	48.0%	32.0%	8.0%	8.0%	4.0%
	公共	27.3%	63.6%	9.1%	0.0%	0.0%
	生命	28.1%	44.9%	11.2%	11.2%	4.5%
	文学	16.0%	28.0%	12.0%	20.0%	24.0%
指導教員以外の教員	公共	9.1%	54.5%	27.3%	9.1%	0.0%
	生命	9.0%	34.8%	27.0%	19.1%	10.1%
	文学	40.0%	16.0%	12.0%	16.0%	16.0%
	公共	45.5%	27.3%	18.2%	9.1%	0.0%
研究室の仲間	生命	27.0%	42.7%	15.7%	6.7%	7.9%
	文学	20.0%	24.0%	20.0%	16.0%	20.0%
	公共	18.2%	36.4%	36.4%	9.1%	0.0%
	生命	25.8%	49.4%	9.0%	7.9%	7.9%
研究科の先輩・後輩	文学	24.0%	24.0%	12.0%	16.0%	24.0%
	公共	18.2%	45.5%	27.3%	9.1%	0.0%
	生命	15.7%	30.3%	19.1%	15.7%	19.1%
	文学	20.0%	48.0%	12.0%	12.0%	8.0%
家族（親・きょうだい）	公共	18.2%	72.7%	0.0%	9.1%	0.0%
	生命	30.3%	38.2%	13.5%	9.0%	9.0%
	文学	0.0%	0.0%	8.0%	28.0%	64.0%
	生命	0.0%	0.0%	27.3%	27.3%	45.5%
友人・恋人	公共	2.2%	3.4%	15.7%	13.5%	65.2%
	生命	0.0%	0.0%	27.3%	27.3%	45.5%
学生相談室	公共	2.2%	3.4%	15.7%	13.5%	65.2%
	生命	0.0%	0.0%	27.3%	27.3%	45.5%

※文学：文学研究科／公共：公共政策学研究科／生命：生命環境科学研究科

文学研究科において有意に低く、逆に生命環境科学研究科では有意に高く、他方「全くあてはまらない」と回答した者の割合が文学研究科において有意に高くなっていた。母数が極めて小さいことへの注意は必要だが、公共政策学研究科において「どちらともいえない」と回答した者の割合が有意に高くなっていた。この結果は端的に、研究科の定員や体制の違いが、先輩もしくは後輩との接触頻度の違いとなって現れ、回答結果に反映されているものと考えられる。

(4) 研究生活への満足度

表 3-4-1 は研究生活への満足度について尋ねた結果を整理したものである。まず、「研究に意欲を持って取り組んでいる」という設問に対して、「あてはまる」という回答群の割合が約 8 割と際立って高くなっており、大学院生の意欲の高さが伺われる。少し割合は低くなるが、「研究・指導体制に満足している」という設問に対して、「あてはまる」という回答群の割合が約 3 分の 2 と、比較的高くなっていった。残りの設問について、「あてはまる」という回答群の割合が高かった順に「研究において能力が発揮できている」、「将来についての目標が明確になってきている」、「研究の設備環境に満足している」となっており、いずれも 45% 前後に留まった。ただし、「研究において能力が発揮できている」という設問に対しては、「どちらともいえない」と回答した者の割合が 45% にまで上っており、能力発揮への自己評価は非常に揺らいでいることが分かった。「研究生活全般において満足している」という設問に対しては、「あてはまる」という回答群の割合が 5 割を上回っていた。

表 3-4-1 研究生活への満足度

	n	とても あてはまる	やや あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	全く あてはまらない
研究に意欲を持って取り組んでいる	125	44 (35.2%)	56 (44.8%)	19 (15.2%)	3 (2.4%)	3 (2.4%)
研究・指導体制に満足している	125	30 (24.0%)	53 (42.4%)	25 (20.0%)	12 (9.6%)	5 (4.0%)
研究の設備環境に満足している	125	13 (10.4%)	42 (33.6%)	27 (21.6%)	31 (24.8%)	12 (9.6%)
研究において能力が発揮できている	125	12 (9.6%)	34 (27.2%)	56 (44.8%)	18 (14.4%)	5 (4.0%)
将来についての目標が明確になってきている	125	20 (16.0%)	37 (29.6%)	30 (24.0%)	31 (24.8%)	7 (5.6%)
研究生活全般において満足している	125	13 (10.4%)	51 (40.8%)	40 (32.0%)	17 (13.6%)	4 (3.2%)

本設問においてはさらに、「とてもあてはまる」、「ややあてはまる」、「どちらともいえない」、「あまりあてはまらない」、「全くあてはまらない」という 5 件法によるリッカート尺度を採用しているが、それを間隔尺度と見做して相関分析を行い、ピアソン (Pearson) の積率相関係数を算出した。その結果が表 3-4-2 である。また、本来順序尺度であるから、あてはまる度合いに応じて順位を付けて相関分析を行い、スピアマン (Spearman) の順位相関係数も算出した。その結果が表 3-4-3 である。全般的な相関関係を示しており、両者の比較については、細かな違いはあるものの、相関の程度や傾向といった点については概ね一致する結果であると言えよう。いずれも相対的に相関の程度が高くなっているのは研究に意欲的に取り組む程度であり、特に研究・指導体制に満足しているか、研究において能力が発揮できているか、将来についての目標が明確になってきているか、という問いに対する相関の程度が相対的に高くなっていた。研究生活全般への満足度も、総じて他との相関の程度が比較的高くなっており、中でも研究・指導体制への満足度や研究において能力が発揮できているかという点と相関の程度が高くなっていた。

表 3-4-2 研究生活への満足度についての相関分析 (Pearson)

	研究に意欲を持って取り組んでいる	研究・指導体制に満足している	研究の設備環境に満足している	研究において能力が発揮できている	将来についての目標が明確になってきている	研究生活全般において満足している
研究に意欲を持って取り組んでいる						
研究・指導体制に満足している	0.4164					
研究の設備環境に満足している	0.6209	0.3803				
研究において能力が発揮できている	0.2826	0.2102	0.4375			
将来についての目標が明確になってきている	0.6124	0.2799	0.5528	0.2691		
研究生活全般において満足している	0.4168	0.4331	0.5391		0.5124	

※5%水準で有意な結果のみ記載している。

表 3-4-3 研究生活への満足度についての相関分析 (Spearman)

	研究に意欲を持って取り組んでいる	研究・指導体制に満足している	研究の設備環境に満足している	研究において能力が発揮できている	将来についての目標が明確になってきている	研究生活全般において満足している
研究に意欲を持って取り組んでいる						
研究・指導体制に満足している	0.4473					
研究の設備環境に満足している	0.5828	0.3955				
研究において能力が発揮できている	0.2736	0.2073	0.4103			
将来についての目標が明確になってきている	0.5631	0.3011	0.5340	0.2430		
研究生活全般において満足している	0.4164	0.4605	0.5085	0.1022	0.5480	

※5%水準で有意な結果のみ記載している。

これらは飽くまで相関分析による考察であり、因果連関を確定できないことに注意が必要である。それを踏まえて、意欲的な姿勢が研究に関わる様々な事柄への充実度に影響しているとも、あるいは研究生活全般に満足しているか必然的に様々な事柄への充実度に影響しているとも、どちらとも考えられる。

表 3-4-4 は研究生活への満足度について尋ねた結果を男女別にまとめたものである。これらについて Fisher の直接確率検定（両側検定）を行ったところ、「研究・指導体制に満足している」（ $p = 0.007$ ）という項目について統計的に有意な結果が得られた（5%水準）。これが、感じ方の違いに起因するものなのか、実際の体制の違いなのか、求める水準の違いなのか、様々な要因が考えられるが、非常に興味深い結果であったため、より掘り下げた調査・分析が必要であろう。

表 3-4-4 研究生活への満足度（男女別・%）

		とても あてはまる	やや あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	全く あてはまらない
研究に意欲を持って取り組んでいる	男性	36.4%	38.2%	18.2%	3.6%	3.6%
	女性	34.3%	50.0%	12.9%	1.4%	1.4%
研究・指導体制に満足している	男性	23.6%	29.1%	23.6%	14.5%	9.1%
	女性	24.3%	52.9%	17.1%	5.7%	0.0%
研究の設備環境に満足している	男性	9.1%	32.7%	23.6%	25.5%	9.1%
	女性	11.4%	34.3%	20.0%	24.3%	10.0%
研究において能力が発揮できている	男性	10.9%	32.7%	36.4%	14.5%	5.5%
	女性	8.6%	22.9%	51.4%	14.3%	2.9%
将来についての目標が明確になってきている	男性	18.2%	30.9%	18.2%	27.3%	5.5%
	女性	14.3%	28.6%	28.6%	22.9%	5.7%
研究生活全般において満足している	男性	12.7%	36.4%	25.5%	20.0%	5.5%
	女性	8.6%	44.3%	37.1%	8.6%	1.4%

表 3-4-5 研究生活への満足度（研究科別・%）

		とても あてはまる	やや あてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	全く あてはまらない
研究に意欲を持って取り組んでいる	文学	44.0%	40.0%	12.0%	0.0%	4.0%
	公共	27.3%	45.5%	27.3%	0.0%	0.0%
	生命	33.7%	46.1%	14.6%	3.4%	2.2%
	文学	32.0%	48.0%	8.0%	4.0%	8.0%
研究・指導体制に満足している	公共	18.2%	36.4%	36.4%	9.1%	0.0%
	生命	22.5%	41.6%	21.3%	11.2%	3.4%
	文学	4.0%	24.0%	20.0%	28.0%	24.0%
研究の設備環境に満足している	公共	0.0%	45.5%	36.4%	18.2%	0.0%
	生命	13.5%	34.8%	20.2%	24.7%	6.7%
	文学	0.0%	24.0%	48.0%	16.0%	12.0%
研究において能力が発揮できている	公共	0.0%	45.5%	36.4%	18.2%	0.0%
	生命	13.5%	25.8%	44.9%	13.5%	2.2%
	文学	4.0%	40.0%	24.0%	20.0%	12.0%
将来についての目標が明確になってきている	公共	9.1%	54.5%	18.2%	18.2%	0.0%
	生命	20.2%	23.6%	24.7%	27.0%	4.5%
	文学	0.0%	40.0%	32.0%	16.0%	12.0%
研究生活全般において満足している	生命	0.0%	45.5%	54.5%	0.0%	0.0%
	公共	14.6%	40.4%	29.2%	14.6%	1.1%

※文学：文学研究科／公共：公共政策学研究科／生命：生命環境科学研究科

表 3-4-5 は研究生活への満足度について尋ねた結果を研究科別にまとめたものである。これらについて Fisher の直接確率検定（両側検定）を行ったところ、5%水準では統計的に有意な結果が得られなかったが、10%水準では「研究生活全般において満足している」

($p=0.059$) という項目について統計的に有意な結果が得られた。他の設問において、文学研究科と他の2研究科との間に統計的な有意差は見られなかった。それと同時に、全体的な傾向として、研究生活全般に対する満足度と、その他様々な事柄との間に一定程度の相関関係があることが確認されている。以上のことを重ね合わせると、様々な要因が細かく蓄積された結果、総体的に文学研究科での研究生活全般に対する満足度が低くなったものと考えられる。具体的な要因が特定できた訳ではないから、その内実についてより詳細な検討が求められる。

4. 支援事業

(1) 支援ニーズ

表 4-1-1 は、例示される支援を男女共同参画推進室が提供する場合に利用したいと思うかどうかを尋ねたものに対して、今必要があるか否かで整理したものである。全体的に「研究支援のためのスキルアップ講座」を必要とする者の割合が高かった。その中でも、「プレゼンテーション能力」、「英語論文作成」、「調査研究スキル等」の、研究活動に直結するスキルを向上させることを望んでいる割合が高かった。続いて、「進学・就職支援のための講座（OB/OG の体験談等）」や「経済面での支援」といった、自らの生活や将来に直接的に関わる内容を必要とする者の割合が高くなっていった。相談支援やカウンセリングを求める者の割合は高くなく、それは「進路・就職相談窓口」であっても同様であった。「健康面(女性の

表 4-1-1 調査協力者の支援ニーズ

	n	今必要がある	どちらとも いえない	今は必要ない
経済面での支援	124	44 (35.5%)	21 (16.9%)	59 (47.6%)
健康面(女性の場合は女性特有の悩みも含む) の支援	124	22 (17.7%)	39 (31.5%)	63 (50.8%)
進路・就職相談窓口	125	34 (27.2%)	39 (31.2%)	52 (41.6%)
進学・就職支援のための講座(OB/OGの体験談 等)	125	42 (33.6%)	34 (27.2%)	49 (39.2%)
大学院生同士の交流の機会	125	33 (26.4%)	45 (36.0%)	47 (37.6%)
将来への不安等悩みに関するキャリアカウ ンセリング	124	30 (24.2%)	49 (39.5%)	45 (36.3%)
先輩や女性教員から具体的な助言をもらえる 相談制度(メンター制度等)	125	28 (22.4%)	39 (31.2%)	58 (46.4%)
a 英語論文作成	125	51 (40.8%)	24 (19.2%)	50 (40.0%)
b プレゼンテーション能力	125	66 (52.8%)	24 (19.2%)	35 (28.0%)
c 調査研究スキル等	125	55 (44.0%)	32 (25.6%)	38 (30.4%)
d リーダーシップ開発研修	125	37 (29.6%)	41 (32.8%)	47 (37.6%)
e 科研費の獲得	124	46 (37.1%)	33 (26.6%)	45 (36.3%)

場合は女性特有の悩みも含む)の支援」や「先輩や女性教員から具体的な助言をもらえる相談制度(メンター制度等)」といった、特に女性を対象とする内容については割合が低くなっていた。

表 4-1-2 は、調査協力者の支援ニーズをさらに男女別に整理したものである。これらについて Fisher の直接確率検定(両側検定)を行ったところ、「進学・就職支援のための講座(OB/OG の体験談等)」($p=0.011$)、「先輩や女性教員から具体的な助言をもらえる相談制度(メンター制度等)」($p=0.004$)という2項目について統計的に有意な結果が得られた(5%水準)。これに加えて、「今は必要ない」と回答した者の割合も高い(「どちらともいえない」という中間層の割合が低い)ために有意差としては表れてきておらず、軽率にまとめることはできないが、「健康面(女性の場合は女性特有の悩みも含む)の支援」に対する女性のニーズも大きくなっている。「女性」に限る様なワーディング上の問題もあるとは言え、これが端的に女性の支援ニーズをまさしく示しているとするならば、根本的な問題(原因)に対する解決が求められる。

表 4-1-2 調査協力者の支援ニーズ(男女別・%)

		今必要がある	どちらとも いえない	今は必要ない
経済面での支援	男性	36.4%	16.4%	47.3%
	女性	34.8%	17.4%	47.8%
健康面(女性の場合は女性特有の悩みも含む)の支援	男性	12.7%	38.2%	49.1%
	女性	21.7%	26.1%	52.2%
進路・就職相談窓口	男性	18.2%	38.2%	43.6%
	女性	34.3%	25.7%	40.0%
進学・就職支援のための講座(OB/OGの体験談等)	男性	20.0%	34.5%	45.5%
	女性	45.1%	21.1%	33.8%
大学院生同士の交流の機会	男性	29.1%	36.4%	34.5%
	女性	24.3%	35.7%	40.0%
将来への不安等悩みに関するキャリアカウンセリング	男性	20.0%	38.2%	41.8%
	女性	27.5%	40.6%	31.9%
先輩や女性教員から具体的な助言をもらえる相談制度(メンター制度等)	男性	10.9%	43.6%	45.5%
	女性	31.4%	21.4%	47.1%
a 英語論文作成	男性	40.0%	20.0%	40.0%
	女性	41.4%	18.6%	40.0%
b プレゼンテーション能力	男性	50.9%	16.4%	32.7%
	女性	54.3%	21.4%	24.3%
c 調査研究スキル等	男性	38.2%	25.5%	36.4%
	女性	48.6%	25.7%	25.7%
d リーダーシップ開発研修	男性	29.1%	32.7%	38.2%
	女性	30.0%	32.9%	37.1%
e 科研費の獲得	男性	34.5%	23.6%	41.8%
	女性	39.1%	29.0%	31.9%

表 4-1-3 は、調査協力者の支援ニーズをさらに研究科別に整理したものである。これらについて Fisher の直接確率検定を行ったところ、統計的に有意な結果は得られなかった(両

側検定・5%水準)。各項目の内容から判断して研究科・研究領域によって差異があると考え得る「研究支援のためのスキルアップ講座」においても違いが見られず、全般的なニーズの高さが見られた。

表 4-1-3 調査協力者の支援ニーズ（研究科別・%）

		今必要がある	どちらとも いえない	今は必要ない
経済面での支援	文学	40.0%	8.0%	52.0%
	公共	63.6%	18.2%	18.2%
	生命	30.7%	19.3%	50.0%
健康面（女性の場合は女性特有の悩みも含む） の支援	文学	20.0%	16.0%	64.0%
	公共	18.2%	36.4%	45.5%
	生命	17.0%	35.2%	47.7%
進路・就職相談窓口	文学	24.0%	24.0%	52.0%
	公共	18.2%	36.4%	45.5%
	生命	29.2%	32.6%	38.2%
進学・就職支援のための講座（OB/OGの体験談 等）	文学	28.0%	32.0%	40.0%
	公共	45.5%	27.3%	27.3%
	生命	33.7%	25.8%	40.4%
大学院生同士の交流の機会	文学	24.0%	40.0%	36.0%
	公共	36.4%	18.2%	45.5%
	生命	25.8%	37.1%	37.1%
将来への不安等悩みに関するキャリアカウン セリング	文学	16.7%	29.2%	54.2%
	公共	27.3%	54.5%	18.2%
	生命	25.8%	40.4%	33.7%
先輩や女性教員から具体的な助言をもらえる 相談制度（メンター制度等）	文学	28.0%	20.0%	52.0%
	公共	36.4%	27.3%	36.4%
	生命	19.1%	34.8%	46.1%
a 英語論文作成	文学	44.0%	12.0%	44.0%
	公共	54.5%	9.1%	36.4%
	生命	38.2%	22.5%	39.3%
b プレゼンテーション能力	文学	48.0%	12.0%	40.0%
	公共	63.6%	18.2%	18.2%
	生命	52.8%	21.3%	25.8%
c 調査研究スキル等	文学	48.0%	16.0%	36.0%
	公共	63.6%	9.1%	27.3%
	生命	40.4%	30.3%	29.2%
d リーダーシップ開発研修	文学	36.0%	20.0%	44.0%
	公共	45.5%	18.2%	36.4%
	生命	25.8%	38.2%	36.0%
e 科研費の獲得	文学	44.0%	20.0%	36.0%
	公共	63.6%	9.1%	27.3%
	生命	31.8%	30.7%	37.5%

※文学：文学研究科／公共：公共政策学研究科／生命：生命環境科学研究科

（２）期待度

表 4-2-1 は、例示される支援を男女共同参画推進室が提供する場合に利用したいと思うかどうかを尋ねたものに対して、今後利用したいか否かで整理したものである。将来的なニーズも含めると、「経済面での支援」を利用したいという割合が最も高くなっていた。それ以外ではやはり「研究支援のためのスキルアップ講座」を必要とする者の割合が高かった。

その中では、「プレゼンテーション能力」、「英語論文作成」、「調査研究スキル等」の、研究活動に直結するスキルを向上させることを望んでいる割合が同様に高くなっていた。「健康面(女性の場合は女性特有の悩みも含む)の支援」や「進路・就職相談窓口」を利用したいという割合が、今必要であるかという問いとは逆に高くなっていた。これらはニーズとして顕在化していないが、将来的な人生設計におけるリスク要因と捉えているものと考えられる。「将来への不安等悩みに関するキャリアカウンセリング」を利用したいという回答割合は相対的に低いままであった。これは、飽くまで将来的な可能性を尋ねているためであり、具体的な不安・悩みのイメージが難しかったためではないだろうか。

表 4-2-1 調査協力者のニーズに対する支援利用の期待度

	n	利用したい	どちらとも いえない	利用したくない
経済面での支援	124	98 (79.0%)	21 (16.9%)	5 (4.0%)
健康面(女性の場合は女性特有の悩みも含む)の支援	124	75 (60.5%)	39 (31.5%)	10 (8.1%)
進路・就職相談窓口	125	78 (62.4%)	39 (31.2%)	8 (6.4%)
進学・就職支援のための講座(OB/OGの体験談等)	125	80 (64.0%)	34 (27.2%)	11 (8.8%)
大学院生同士の交流の機会	125	64 (51.2%)	45 (36.0%)	16 (12.8%)
将来への不安等悩みに関するキャリアカウンセリング	124	61 (49.2%)	49 (39.5%)	14 (11.3%)
先輩や女性教員から具体的な助言をもらえる相談制度(メンター制度等)	125	73 (58.4%)	39 (31.2%)	13 (10.4%)
a 英語論文作成	125	92 (73.6%)	24 (19.2%)	9 (7.2%)
b プレゼンテーション能力	125	96 (76.8%)	24 (19.2%)	5 (4.0%)
c 調査研究スキル等	125	84 (67.2%)	32 (25.6%)	9 (7.2%)
d リーダーシップ開発研修	125	63 (50.4%)	41 (32.8%)	21 (16.8%)
e 科研費の獲得	124	85 (68.5%)	33 (26.6%)	6 (4.8%)

表 4-2-2 は、調査協力者のニーズに対する支援利用の期待度をさらに男女別に整理したものである。これらについて Fisher の直接確率検定(両側検定)を行ったところ、「健康面(女性の場合は女性特有の悩みも含む)の支援」($p=0.043$)、「将来への不安等悩みに関するキャリアカウンセリング」($p=0.020$)、「先輩や女性教員から具体的な助言をもらえる相談制度(メンター制度等)」($p=0.0001$)という3項目について統計的に有意な結果が得られた(5%水準)。これらの3項目は、上述の支援ニーズと整合性のある結果として表れていると考えて良いであろう。表 4-1-2 では「進学・就職支援のための講座(OB/OGの体験談等)」という具体的なニーズであったのに対して、ここでは「将来への不安等悩みに関するキャリアカウンセリング」という、まさに「今後の」問題に置き換わった結果となったものと考えられる。

表 4-2-2 調査協力者のニーズに対する支援利用の期待度（男女別・％）

		利用したい	どちらとも いえない	利用したくない
経済面での支援	男性	80.0%	16.4%	3.6%
	女性	78.3%	17.4%	4.3%
健康面（女性の場合は女性特有の悩みも含む） の支援	男性	49.1%	38.2%	12.7%
	女性	69.6%	26.1%	4.3%
進路・就職相談窓口	男性	54.5%	38.2%	7.3%
	女性	68.6%	25.7%	5.7%
進学・就職支援のための講座（OB/OG の体験談 等）	男性	58.2%	34.5%	7.3%
	女性	68.6%	21.4%	10.0%
大学院生同士の交流の機会	男性	50.9%	36.4%	12.7%
	女性	51.4%	35.7%	12.9%
将来への不安等悩みに関するキャリアカウン セリング	男性	41.8%	38.2%	20.0%
	女性	55.1%	40.6%	4.3%
先輩や女性教員から具体的な助言をもらえる 相談制度（メンター制度等）	男性	38.2%	43.6%	18.2%
	女性	74.3%	21.4%	4.3%
a 英語論文作成	男性	74.5%	20.0%	5.5%
	女性	72.9%	18.6%	8.6%
b プレゼンテーション能力	男性	80.0%	16.4%	3.6%
	女性	74.3%	21.4%	4.3%
c 調査研究スキル等	男性	67.3%	25.5%	7.3%
	女性	67.1%	25.7%	7.1%
d リーダーシップ開発研修	男性	49.1%	32.7%	18.2%
	女性	51.4%	32.9%	15.7%
e 科研費の獲得	男性	70.9%	23.6%	5.5%
	女性	66.7%	29.0%	4.3%

表 4-2-3 は、調査協力者のニーズに対する支援利用の期待度をさらに男女別に整理したものである。これらについて Fisher の直接確率検定を行ったところ、統計的に有意な結果は得られなかった（両側検定・5%水準）。上述と同じく、研究科・研究領域の違いが（本設問で尋ねる）ニーズや期待度という形での違いとなって表れてこなかったということであろう。

表 4-2-3 調査協力者のニーズに対する支援利用の期待度（研究科別・％）

		利用したい	どちらとも いえない	利用したくない
経済面での支援	文学	88.0%	8.0%	4.0%
	公共	72.7%	18.2%	9.1%
	生命	77.3%	19.3%	3.4%
健康面（女性の場合は女性特有の悩みも含む） の支援	文学	76.0%	16.0%	8.0%
	公共	54.5%	36.4%	9.1%
	生命	56.8%	35.2%	8.0%
進路・就職相談窓口	文学	68.0%	24.0%	8.0%
	公共	54.5%	36.4%	9.1%
	生命	61.8%	32.6%	5.6%
進学・就職支援のための講座（OB/OG の体験談 等）	文学	60.0%	32.0%	8.0%
	公共	63.6%	27.3%	9.1%
	生命	65.2%	25.8%	9.0%

		利用したい	どちらとも いえない	利用したくない
大学院生同士の交流の機会	文学	52.0%	40.0%	8.0%
	公共	63.6%	18.2%	18.2%
	生命	49.4%	37.1%	13.5%
将来への不安等悩みに関するキャリアカウンセリング	文学	54.2%	29.2%	16.7%
	公共	45.5%	54.5%	0.0%
	生命	48.3%	40.4%	11.2%
先輩や女性教員から具体的な助言をもらえる相談制度(メンター制度等)	文学	68.0%	20.0%	12.0%
	公共	63.6%	27.3%	9.1%
	生命	55.1%	34.8%	10.1%
a 英語論文作成	文学	84.0%	12.0%	4.0%
	公共	81.8%	9.1%	9.1%
	生命	69.7%	22.5%	7.9%
b プレゼンテーション能力	文学	88.0%	12.0%	0.0%
	公共	72.7%	18.2%	9.1%
	生命	74.2%	21.3%	4.5%
c 調査研究スキル等	文学	84.0%	16.0%	0.0%
	公共	81.8%	9.1%	9.1%
	生命	60.7%	30.3%	9.0%
d リーダーシップ開発研修	文学	56.0%	20.0%	24.0%
	公共	72.7%	18.2%	9.1%
	生命	46.1%	38.2%	15.7%
e 科研費の獲得	文学	76.0%	20.0%	4.0%
	公共	81.8%	9.1%	9.1%
	生命	64.8%	30.7%	4.5%

※文学：文学研究科／公共：公共政策学研究科／生命：生命環境科学研究科

表 4-2-4 は、相談窓口利用という形態に特化して、利用したいと思うかどうかを尋ねた結果を表したものである。これらを概観したとき、利用群（「ぜひ利用したい」、「機会があれば利用したい」と回避群（「利用する予定はない」、「利用したくない」）の割合、また特に「ぜひ利用したい」と「利用したくない」とそれぞれ回答した者の割合の関係について、一方の割合が高くなるともう一方が低くなる形での比例関係になる様に、6つの設問を3つに分類することができた。第1分類は「経済面での支援」、「進路（就職）のこと」、第2分類は、「健康面」、「研究の進め方について」、「研究と結婚・育児等を含めた将来のライフプランのこと」、第3分類は「人間関係のこと」であった。第1分類については、生活に直結する項目が該当していると言えるだろう。第2分類については、研究自体、あるいは研究の継続に付随して想定される項目が該当していると言えるだろう。「健康面」についての不安や悩みについては、性質的に第1分類に該当するとも考えられる。しかし、Q4やQ7でも明らかになった様に、今の、あるいは将来的な不安要素として想定する者の割合は決して高くなっていなかった。すなわち、本調査の対象者の中では健康面での不安等をリスクとして認識する者の割合があまり高くない、本人の中で高リスクとしてあまり認識されていないということの傍証であろう。ただし、健康面についての不安や悩みは性別による違いが現れるから、別途検討が必要である。「研究の進め方」については、大学院生にとっては今の生活に直結する問題である。しかし、Q5やQ6からも明らかな様に、本調査の対象者においては研

究生活全般の満足度が高く、悩み等があったとしても教員や仲間に相談できると考えているため、今現在ニーズとして高く位置付けられていないものと考えられる。「研究と結婚・育児等を含めた将来のライフプランのこと」については、「研究」と「結婚・育児等…」という尋ね方をしていることから、研究者（職）志望が少ない、あるいは年代的に結婚や育児を具体的に生活課題として認識、検討していないために、今現在ニーズとして高く位置付けられていないものと考えられる。

表 4-2-4 相談窓口利用の期待度

	n	ぜひ 利用したい	機会があれば 利用したい	どちらとも いえない	利用する 予定はない	利用したく ない
経済面での支援	124	28 (22.6%)	62 (50.0%)	15 (12.1%)	18 (14.5%)	1 (0.8%)
健康面	124	15 (12.1%)	51 (41.1%)	29 (23.4%)	28 (22.6%)	1 (0.8%)
進路（就職）のこと	124	33 (26.6%)	60 (48.4%)	17 (13.7%)	11 (8.9%)	3 (2.4%)
研究と結婚・育児等を含めた将来のライフプランのこと	124	16 (12.9%)	43 (34.7%)	30 (24.2%)	26 (21.0%)	9 (7.3%)
人間関係のこと	123	10 (8.1%)	30 (24.4%)	35 (28.5%)	37 (30.1%)	11 (8.9%)
研究の進め方について	124	24 (19.4%)	42 (33.9%)	21 (16.9%)	31 (25.0%)	6 (4.8%)

表 4-2-5 は相談窓口利用の期待度を男女別に整理したものである。これらについて Fisher の直接確率検定（両側検定）を行ったところ、「経済面での支援」（ $p=0.034$ ）、「研究と結婚・育児等を含めた将来のライフプランのこと」（ $p=0.033$ ）という 2 項目について統計的に有意な結果が得られた（5%水準）。前者について、利用群について男女に有意差が見られた。それぞれの回答群における実際上のニーズの有無や程度は本設問への回答からは判断できない。男女それぞれで今現在強いニーズを有しているかの違いが「ぜひ利用したい」か「機会があれば利用したい」という違いとなって現れたとも考えられるし、男女それぞれのニーズの程度にあまり違いが無いとすれば、相談や依頼を行うといった様な「行為」自体への態度（積極性）における性差の現われとも考えられる。後者であれば、ここまで繰り返し言及していることの傍証であると言えるが、仮に前者であれば、今まさに女性が抱えているニーズとは具体的にどんなものであるか、そのためにどんな対応が考えられるのか、といった検討が早急に必要であろう。後者については、女性は結婚・育児といった点に関する将来のライフプランについて、大学院生という今の立場から既に視野に入れていることが窺える。それに対して男性は、「どちらともいえない」と回答した者の割合が高かったということは、現時点で明確なビジョンを持ち合わせてはいない、あるいはニーズとして顕在化されていないものの、潜在的にその重要性については理解しているものと解釈して良いのではないだろうか。

表 4-2-5 相談窓口利用の期待度（男女別・％）

		ぜひ 利用したい	機会があれば 利用したい	どちらとも いえない	利用する 予定はない	利用したく ない
経済面での支援	男性	13.0%	64.8%	9.3%	13.0%	0.0%
	女性	30.0%	38.6%	14.3%	15.7%	1.4%
健康面	男性	9.3%	38.9%	27.8%	22.2%	1.9%
	女性	14.3%	42.9%	20.0%	22.9%	0.0%
進路（就職）のこと	男性	18.5%	50.0%	16.7%	11.1%	3.7%
	女性	32.9%	47.1%	11.4%	7.1%	1.4%
研究と結婚・育児等を含めた将来のライフプランのこと	男性	3.7%	37.0%	33.3%	18.5%	7.4%
	女性	20.0%	32.9%	17.1%	22.9%	7.1%
人間関係のこと	男性	3.8%	26.4%	28.3%	32.1%	9.4%
	女性	11.4%	22.9%	28.6%	28.6%	8.6%
研究の進め方について	男性	16.7%	25.9%	20.4%	27.8%	9.3%
	女性	21.4%	40.0%	14.3%	22.9%	1.4%

表 4-2-6 は相談窓口利用の期待度を研究科別に整理したものである。これらについて Fisher の直接確率検定（両側検定）を行ったところ、「研究の進め方について」（ $p=0.038$ ）という項目について統計的に有意な結果が得られた（5%水準）。公共政策学研究科は回答者の母数が小さく、「利用する予定はない」と回答した者はいなかった。しかし、「機会があれば利用したい」と回答した者が 63.6%と集中しており、その裏返しとして相対的に「利用する予定はない」と回答した者の割合が有意に低いとされる結果になったものと考えられる。まとめると、回答者数は少なかったものの、今回の回答者の中では研究の進め方に対する相談・支援は好意的に評価されている、あるいは潜在的なニーズとして既にあるのかもしれない。これとは逆に、生命環境科学研究科では相談・支援のニーズが弱い、あるいは相談・支援の対象として考えられていないということが読み取れる。

表 4-2-6 相談窓口利用の期待度（研究科別・％）

		ぜひ 利用したい	機会があれば 利用したい	どちらとも いえない	利用する 予定はない	利用したく ない
経済面での支援	文学	24.0%	60.0%	4.0%	12.0%	0.0%
	公共	27.3%	54.5%	9.1%	9.1%	0.0%
	生命	21.6%	46.6%	14.8%	15.9%	1.1%
健康面	文学	16.0%	60.0%	4.0%	20.0%	0.0%
	公共	9.1%	36.4%	36.4%	18.2%	0.0%
	生命	11.4%	36.4%	27.3%	23.9%	1.1%
進路（就職）のこと	文学	36.0%	48.0%	4.0%	8.0%	4.0%
	公共	18.2%	54.5%	18.2%	0.0%	9.1%
	生命	25.0%	47.7%	15.9%	10.2%	1.1%
研究と結婚・育児等を含めた将来のライフプランのこと	文学	24.0%	40.0%	12.0%	16.0%	8.0%
	公共	9.1%	36.4%	27.3%	27.3%	0.0%
	生命	10.2%	33.0%	27.3%	21.6%	8.0%
人間関係のこと	文学	12.0%	24.0%	24.0%	32.0%	8.0%
	公共	0.0%	40.0%	40.0%	10.0%	10.0%
	生命	8.0%	22.7%	28.4%	31.8%	9.1%
研究の進め方について	文学	28.0%	40.0%	12.0%	16.0%	4.0%
	公共	36.4%	63.6%	0.0%	0.0%	0.0%
	生命	14.8%	28.4%	20.5%	30.7%	5.7%

※文学：文学研究科／公共：公共政策学研究科／生命：生命環境科学研究科

(3) 利用の現状

表 4-3-1 は、男女共同参画推進事業の利用についての現状を尋ねた結果である。全体的にどの質問項目でも大きく傾向が異なるということはなく、約 65%～70%が「知らない」と回答し、「知っている」と回答した者の中でも「利用したことがある」と回答した者の割合はいずれもわずか5%前後に留まっている。本設問で挙げられているサービス、制度について、いずれも利用したことが無い者の割合は約 90%と非常に高くなっていた。しかし、利用したことは無いが知っているという回答は一定数あった。それでも、いずれも知らないと回答した者の割合は半数近くにも及んだ。

男女共同参画推進室のニュースレター、リーフレット、男女共同参画推進室のホームページは、特定の事柄についてではなく、男女共同参画推進室とはそもそもどういった組織であるか、どういった大きな理念に基づいて、どういった取り組みを行っているか、等の情報発信を行うためのものである。ニュースレター、リーフレットは対外的に様々な場所で、様々な場面で積極的に情報発信を行うことが可能なツールであるが、本調査におけるデータからは有効に機能していないということが窺われる。ホームページについては基本的に受動的な存在で、閲覧者の能動的な行為によってのみ情報を受け渡すことができるものである。それは、大学本体その他の様々な Web サイトとリンクを張っていても同様のことが当てはまる。他方、今回の調査においては男女共同参画推進室主催のセミナー、サロン、シンポジウムへの参加について、利用経験が最も多く、あるいは認知度が最も高かった。集客のためにいかにテーマを設定するかという技術的な側面を工夫すれば、いくらでも利用者を増やす、あるいは認知度を高めることが可能である。ただし、セミナー、サロン、シンポジウムのテーマそれ自体への興味だけでは、企画者としての男女共同参画推進室の存在を認知してもらうことはできず、かつ男女共同参画推進事業の理念への理解も得られない。それでも現時点では、セミナー、サロン、シンポジウムを広報の最大の機会として活用することが最も良い方策である様に思われる。

表 4-3-1 男女共同参画推進事業の利用についての現状

	n	知っている		知らない
		利用したことがある	利用したことはない	
男女共同参画推進室の場所について	124	8 (6.5%)	35 (28.2%)	81 (65.3%)
男女共同参画推進室主催のセミナー、 サロン、シンポジウムへの参加	124	6 (4.8%)	39 (31.5%)	79 (63.7%)
男女共同参画推進室のニュースレター、 リーフレット	124	6 (4.8%)	30 (24.2%)	88 (71.0%)
男女共同参画推進室のホームページ	124	4 (3.2%)	33 (26.6%)	87 (70.2%)
研究支援員制度（女性研究者研究支援）	124	7 (5.6%)	31 (25.0%)	86 (69.4%)

表 4-3-2 は、男女共同参画推進事業の利用についての現状を尋ねた結果を男女別に整理したものである。Fisher の直接確率検定（両側検定）を行ったところ、「男女共同参画推進

室の場所について」(p= 0.020)、「研究支援員制度（女性研究者研究支援）」(p= 0.008)の2項目で統計的に有意な結果が得られた（5%水準）。いずれも女性の方が利用した割合が高くなっている。研究支援員制度は教員を対象とするものであって、大学院生を直接対象とするものではない。したがって、本制度の情報は教員を経由して知ることが多くなると考えられる。同じ大学院生の立場で、他の者が本制度においてRAとして雇用されていると知ることとも考えられるが、自らが雇用されている、あるいは教員から打診されることが最も多いパターンであろう。したがって、本調査におけるデータ上からは判断できないものの、研究支援員制度を利用しようとする教員の中で女性の占める割合が高く、同性の大学院生を雇用するという理由から、他の設問以上に特に男女の割合で差が生じたのではないだろうか。なお、上記に伴う事務作業の関係で、男女共同参画推進室の場所を知っていると回答した者の割合が高くなっていると考えられる。

表 4-3-2 男女共同参画推進事業の利用についての現状（男女別・％）

		知っている		知らない
		利用したことがある	利用したことはない	
男女共同参画推進室の場所について	男性	0.0%	33.3%	66.7%
	女性	11.4%	24.3%	64.3%
男女共同参画推進室主催のセミナー、サロン、シンポジウムへの参加	男性	5.6%	25.9%	68.5%
	女性	4.3%	35.7%	60.0%
男女共同参画推進室のニュースレター、リーフレット	男性	1.9%	18.5%	79.6%
	女性	7.1%	28.6%	64.3%
男女共同参画推進室のホームページ	男性	1.9%	27.8%	70.4%
	女性	4.3%	25.7%	70.0%
研究支援員制度（女性研究者研究支援）	男性	0.0%	18.5%	81.5%
	女性	10.0%	30.0%	60.0%

表 4-3-3 男女共同参画推進事業の利用についての現状（研究科別・％）

		知っている		知らない
		利用したことがある	利用したことはない	
男女共同参画推進室の場所について	文学	16.0%	20.0%	64.0%
	公共	9.1%	63.6%	27.3%
	生命	3.4%	26.1%	70.5%
男女共同参画推進室主催のセミナー、サロン、シンポジウムへの参加	文学	4.0%	36.0%	60.0%
	公共	0.0%	54.5%	45.5%
	生命	5.7%	27.3%	67.0%
男女共同参画推進室のニュースレター、リーフレット	文学	4.0%	24.0%	72.0%
	公共	0.0%	54.5%	45.5%
	生命	5.7%	20.5%	73.9%
男女共同参画推進室のホームページ	文学	4.0%	28.0%	68.0%
	公共	0.0%	54.5%	45.5%
	生命	3.4%	22.7%	73.9%
研究支援員制度（女性研究者研究支援）	文学	16.0%	20.0%	64.0%
	公共	0.0%	54.5%	45.5%
	生命	3.4%	22.7%	73.9%

※文学：文学研究科／公共：公共政策学研究科／生命：生命環境科学研究科

表 4-3-3 は、男女共同参画推進事業の利用についての現状を尋ねた結果を研究科別に整理したものである。Fisher の直接確率検定（両側検定）を行ったところ、「男女共同参画推進室の場所について」（ $p=0.008$ ）、「研究支援員制度（女性研究者研究支援）」（ $p=0.033$ ）の 2 項目で統計的に有意な結果が得られた（5%水準）。文学研究科の中で女性の割合が他より高くなっていることも間接的に影響しながら、先に述べた要因からこの 2 項目で有意差がでたものと考えられる。

5. 自由記述

ここでは、質問項目に関連する自由記述の意見を掲載する。なお、個人が特定される可能性のある記述は一部削除した。

Q2. (1)-10 博士前期課程進学理由（その他）

- ・ 専門領域において最先端であり、かつ尊敬する研究者のもとでこの領域の研究を行いたかったから。(女性)
- ・ 自分の好きなように生きて野垂れ死ぬなら受け入れられるかな、と。(男性)

Q3. (1)-7 研究環境（その他）

- ・ 精華キャンパスで下鴨の講義を受けれるようにしてほしい。(男性)
- ・ トイレなどの公共空間をもう少しでいいからきれいにしてほしい。(女性)
- ・ 論文検索において閲覧できる論文が少なすぎる。(男性)
- ・ 研究室に冷蔵庫や水道があり、研究設備はもちろんそれ以外の部分も環境が整っていることを知り、初めは驚きました。パソコンや机も十分な数あり、過ごしやすいです。先生方の研究室と同じ階にあるので、コンタクトもとりやすいです。(女性)
- ・ 夏場、夜、エアコンが使用できないのは研究がはかどらない。(男性)
- ・ 冷房施設に不平等性がある。例えば、5号館の研究室では、冷房が18時以降につく部屋とそうでない部屋がある。同じ学費を払っているのに、環境面での不平等性が生じるのはおかしい。(男性)
- ・ トイレが汚い。クーラーがつかないので、夜遅くまで研究できない。(女性)

Q4. 10 研究生活における困りごと（その他）

- ・ 博士前期課程を修了するときに、就職ができるかどうか。(採用の募集が毎年あるわけではなく、行きたいところに行ける、もしくは受験できるとは限らないから)(女性)
- ・ そもそも「就職」が私にとって納得のいく答えなのか？まだ私の知らない最善の答えがあるのではないかと、という所も含めて悩みのタネです。(女性)
- ・ いい歳になってきたので、将来に対する不安は以前より増しました。(男性)
- ・ 研究時間の確保。(男性)
- ・ そんなに簡単に研究がはかどるとは思っていないが、良い結果が出ない場合には、このまま続けていてよいのか？研究に向いていないのではないかと、思い悩む。(女性)

Q5.8 研究生活における相談相手（その他）

- ・ 友人は精華町の研究室に居るので、アテにできないのが残念です。（女性）
- ・ 本音で語り合えない（見えや羞恥心）ので学内の院生と悩みを共有することはほぼない。（男性）
- ・ 部活の後輩、よその大学院の友人。（男性）

Q6.7 研究生活（その他）

- ・ 「1. 研究に意欲を持って取り組んでいるか」については、私自身が苦手なところでもあるので、「ややあてはまる」と答えました。（女性）
- ・ 自分次第なのかな、と。（男性）

Q7.8-f スキルアップ講座（その他）

- ・ 研究資金獲得のための公募（例えば学振など）書類作成力アップ。（女性）

Q7.9 支援策（その他）

- ・ 「経済面での支援」については、欧米諸国の奨学金のようなシステムであることを祈ります。返還義務のある奨学金なんて、支援とは言えないのではないかな。貸してもらえる、というのもまた有り難いことですが。（女性）
- ・ 男にとって、7番（「先輩や女性教員から具体的な助言をもらえる相談員制度」）は女性教員に限定する意味ありますか？（男性）
- ・ 「研究支援のたえのスキルアップ講座」開設はおもしろい案だと思うが、手法だけ頭で理解するのではなく本質まで理解できる人間力を育むことの方が大切だと思う。そのためには講座開設よりも、研究面だけでなく、人としても立派な先生方と交流する機会を増やすことの方が、学生にとってメリットが多いと思う。（女性）
- ・ どちらも言えないというよりも、そのような推進室の支援が必要だとは思わない。（男性）
- ・ たとえば、研究職向けの講座など、特化した内容のものがほしい。特に女性は、結婚・出産などキャリアが区切れる場合があるので。（女性）
- ・ 本大学では生徒数が少数なので、大学院生同士の交流の機会があっても良い。（男性）

Q8.7 相談窓口（その他）

- ・ Q7 もそうだが、下手に就職説明会を実施してもらっても、思考の枠を作るだけになると思う。独立とか、こんな道もあるよ！という道標を立てておいてほしい。就活する人、就職したい人が最終的に（知らず知らず）苦しんでいるのは、自分に最適な道を知らないか、知ろうとしないか、知らされていないからだとは思ふ。（女性）

- ・ 精神的なサポート。辛かったり、鬱、引きこもりそうになったときのカウンセリング等。(女性)

Q10. 研究を進める上での不安

- ・ 自分の研究テーマ以外の雑務が多く、研究に集中できないことがある。もっと研究室間の交流を深め、カテゴリーごとでセミナー等を積極的に入れていくべきだと思う。明らかに研究者の人手が足りないところがある。助手等を積極的に採用していくべき。(男性)
- ・ 就職先があるか。(女性)
- ・ 研究支援の募集や、大学院講義の日程、時間、場所についてのアナウンスが乏しく、学生が自ら調べなければならない状況が負担になっている。無料で見られる論文の出版社の数が少ない。(Elsevier が見られればとても便利)(男性)
- ・ お金、家庭環境。(女性)
- ・ 研究と就活の両立。経済的にも苦しくなっている。(女性)
- ・ 院生室に積極的に学振等に応募する人が少なく(実はしていたとしても修士の後輩だったり)、上にお手本となるような院生が見当たらない。(情報もほとんど回らない) 掲示板もいろんなところにあって、どれをチェックすればよいかわかりづらく、私が入ったときはガイダンスでの説明もなかったので、未だに手さぐりの状態。大学でまとめて書類を送るような規模の学振等はずっと説明会を開くなど情報を周知してほしい。(締切や、必要な書類がよくわからず、何度も事務局に行って聞いたりしたし、必要書類がわかったタイミングが締切間際だったりして、結局諦めざるをえなかった。) 留学も考えているが、学部向けと思われる相談会は見かけても、院生向けではなさそうなので、情報を集めるのに苦労している。(女性)
- ・ 素晴らしい先生に教えてもらっているので特にありません。ありがとうございます！(女性)
- ・ タイムマネジメントが弱い。やるときは夜遅く、徹夜も厭わず、実験に取り組んでいることがままある。(取り組んでしまう) 学生の内ならいいが、社会で金がもらえるスタイルではない。より計画的に研究を進められるようになりたい。(男性)
- ・ スケジュール、資料集め、調査対象の決定。(女性)
- ・ 使用する機器が他大学にしかなく不便。(女性)
- ・ 能力の有無に関わらず女性が優遇されてしまわないかどうか。(男性)
- ・ 研究をする上で進め方が甘く、なかなか進まないことに不安を感じる。(男性)
- ・ 最近、疲れやすくなってきたこと。(男性)
- ・ 研究室に女性の院生以上の人がないこと(先生を含め)。大きな悩みや障害ではないが、身近にいたらいいな…とは思う。(女性)
- ・ 介護との両立。進学理由の一つが今就職しても確実に介護しながらは無理だと判断

したから、というのもあり、意欲がわからない。家庭事情を理解できる人が大人も含めて、ほぼ皆無なので、その辺の相談ができず、たまに精神的にキツイことがある。(男性)

- ・ 研究が社会に貢献できるかどうか。(男性)
- ・ あまり進まなくて不安になる。やるべきことが多い。(男性)
- ・ 研究をこの先どのように進めていくべきか、など。(男性)
- ・ 自分のプレゼンテーション能力と研究費。(女性)
- ・ 両親が退職しているため、経済面で不安は常に持っている。私自身もアルバイトをしている余裕は十分になく、制度や科研費に頼らざるを得ない状況である。しかし、制度は軽減してくれるが、経済的問題を解決してくれるまでには至らず、科研費も申請が通らない方が多いため、頼りにはできない。(女性)
- ・ お金。(女性)
- ・ とりあえず、参考にできる本は少なく、不便と感じる。何故京大の方に何でも入っているのか。(男性)
- ・ 研究室の人間関係。(男性)
- ・ 研究をして業績(論文等)を作りたいが、健康面(身体的、精神的)に不安があり、研究に対して意欲的に取り組めないこと。(男性)
- ・ 試験の勉強との両立。(女性)
- ・ 将来的に研究者になれる可能性が少なく、希望してはいても実現の見込みは少ないと感じます。(女性)
- ・ 研究時間の確保。(男性)
- ・ 自分が望む研究は先行研究も少なく、現在は手探りで進んでいる状態である。これで50枚も論文を書くことができるのか、非常に不安である。担当教員は親切でアドバイスもくれているので、それを受けて自分がしっかり目標を持ってやらねばならない、とプレッシャーを自分自身にかけてしまう。就職活動もあり、なかなか集中できないというのが現在の本音である。(女性)

Q11. ご意見・ご要望

- ・ 女性の研究職を入れようとするあまり、質の低い教授が来られても困る。逆男女差別にならないか不安。(男性)
- ・ 院生同士の交流の場は欲しい。研究職に特化した相談窓口があれば利用したい。(男性)
- ・ そもそも、研究者を取り巻くシステムに問題があるのでは？その辺のことはよくわかりませんが、システムに問題があるから、STAP細胞問題は生まれたのではないかと考えています。STAP細胞で国際特許を取っている(今なら取っていただろうか)のに、後になって問題があるとか、小保方さんより年上の人達が責任として、例えば記者会

見で話すとか、そういうことをしなかった事の方が問題ではないのですか？ ※研究者とは何かなど、そういった根本を見てください。若者だけを教育しても意味はありません。(女性)

- ・ 女性の支援をしてもらえるのは非常に有りがたい。将来のことを考えると、結婚、妊娠しても職を失わないような、子育てをしながら研究生活を両立できるような支援を行ってほしい。(女性)
- ・ 個人特定できそうな質問項目は入れない方がいいと思う。特に、ドクターは少ないので、ほぼ丸わかりだと…。(男性)
- ・ そもそも、あまり存在が知られていないのでは。(男性)
- ・ 何をやっているのかよくわかりません。(女性)
- ・ 現時点ではあまり必要性を感じないが、必要と感じる人もいるだろうし何とも言えない。(男性)
- ・ 若手研究者支援を是非充実させてほしいです。(女性)
- ・ とりあえず参考書がほしい。(男性)
- ・ 名古屋大学や岡山大学などが行っている、ドクターコースの学生に対する就職支援を行ってほしい。(男性)
- ・ もっと利用の機会があるといいです。(女性)
- ・ 部屋が気軽に立ち寄れる位置にないので、もう少し近くにあると便利でよいと思います。(女性)
- ・ 研究生生活では、キャリアがないが、苦手ではないので、年齢制限をいつも理不尽に思う。(女性)
- ・ 院生になり、初めて男女共同参画推進室に行く機会があったが、非常に雰囲気が良かった。今までこのような取り組みに興味を持つことがなかったが、女性研究者を支える取り組みとして、研究支援員を経験し、少し理解できたし興味も湧いた。(女性)

6. 総括

本報告では、質問内容から調査協力者である大学院生の現状を概観した後、男女別、研究科別にそれぞれの特徴や傾向を観察し、要因の検討・分析を行った。男女別、研究科別で一貫した特徴はあまり表れなかったが、示唆に富むいくつかの気付きを得ることができた。

「大学院生の研究生生活の現状ならびに支援ニーズの把握」を目的として実施されたものであるが、現状については詳細に確認することができたと言って良いだろう。ただし、例えば在学時間やアルバイト時間、研究上の困難や悩みの詳細については、本調査・本報告の射程を超えており、十分に確認することができなかった。特に「困難」や「悩み」といった部分については、内容が広範に及ぶため、何を手掛かりにして探索していくかが難しいが、本調査はその糸口として位置付けて良いのではないだろうか。

「支援ニーズ」については、性別や研究科の違いに基づく本質的な違い、つまり根本的な問題となる部分についての気付きを得ることができた。しかし、大学院生が、その現状と自らのキャリアデザインとを明確にイメージして結び付ける中で、具体的な困難やニーズを明確に認識しているということは確認されなかった。「現状」と結び付けて支援ニーズを想定していくことは、直近の支援事業展開に大いに資するものであるから、そういった部分の気付きに対しては何かしらの手立てを考えていくべきだろう。一方で、大学院生自身がニーズを認識していないことが確認されている点からは、本調査を糸口としてより潜在的ニーズの掘り起こしを図りつつ、本調査で得られた気付きを大学院生に還元する形で、大学院生全体に共通する、あるいは男女別、研究科別に想定される固有の問題を解決・克服するための支援を先回りで展開していくことが重要になっていくだろう。

IV. 調查票

2014 年 5 月 14 日

大学院生各位

大学院生の現状とニーズ調査 調査協力をお願い

京都府立大学 男女共同参画推進委員会

京都府立大学では、平成25年度からの3年間、文部科学省科学技術人材育成補助事業「女性研究者研究活動支援事業」の採択を受け、男女共同参画推進室を拠点として、研究・教育の場や大学運営における男女共同参画の推進と、若手研究者の育成を進めるための取り組みを展開しています。

本年度は、若手研究者育成事業を中心に事業を展開します。その一環で本学における大学院生のキャリアパスと進路選択の状況を分析し、今後の支援の方策に役立てるために本学男女共同参画推進委員会では、若手研究者である大学院生全員を対象に、アンケート調査を行うこととしました。

なお、本アンケート結果は調査の目的のみに利用し、調査結果は後日ホームページや報告書にて掲載します。統計処理をしますので個人が特定されることはありません。ぜひご協力いただきますようお願い申し上げます。

提出期限 6月6日（金）

提出方法 封筒に入れて男女共同参画推進室（1号館3階）ポスト、学務課教務担当カウンターポスト、または指導教員へご提出ください。

【本調査に関する問い合わせ先】

男女共同参画推進室 （1号館3階 1310号室）

TEL:075-703-5143 Mail:danjo@kpu.ac.jp

1. 4時間未満 2. 4～6時間 3. 6～8時間 4. 8～10時間
5. 10～12時間 6. 12～14時間 7. 14時間以上

1. 0 時間 2. 1～6 時間 3. 6～12 時間 4. 12～18 時間
5. 18～24 時間 6. 24～30 時間 7. 30 時間以上

	とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
1 研究者（大学教員を含む）になりたいから	1	2	3	4	5
2 専門領域（テーマ）をより深めたいから	1	2	3	4	5
3 就職に有利だから	1	2	3	4	5
4 在学中に資格試験等をめざしたいから	1	2	3	4	5
5 在学中に就職活動をしたから	1	2	3	4	5
6 学部卒業時に希望する就職先がなかった、入れなかったから	1	2	3	4	5
7 学部卒業時にまだ働きたくなかったから	1	2	3	4	5
8 大学院では性別に関係なく能力を発揮できそうだから	1	2	3	4	5
9 専門領域（テーマ）以外を含めてもっと勉強したかったから	1	2	3	4	5
10 その他（自由にお書きください）					

1. 研究職（公務員・企業を含む） 2. 非研究職（公務員・企業を含む）
3. 小・中・高・専門学校教員 4. 博士後期課程への進学
5. その他（ ）

Q2. (3) (博士後期課程の方のみお答えください) 博士後期課程進学を選んだ理由として、以下のものはどれくらいあてはまりますか？該当する番号に○印をつけてください。

	とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
1 研究者（大学教員を含む）になりたいから	1	2	3	4	5
2 専門領域（テーマ）をより深めたいから	1	2	3	4	5
3 就職に有利だから	1	2	3	4	5
4 在学中に資格試験等をめざしたいから	1	2	3	4	5
5 在学中に就職活動をしたから	1	2	3	4	5
6 修士修了時に希望する就職先がなかった、入れなかったから	1	2	3	4	5
7 修士修了では希望する職に就くことはできないから	1	2	3	4	5
8 大学院では性別に関係なく能力を発揮できそうだから	1	2	3	4	5
9 専門領域（テーマ）以外を含めてもっと勉強したかったから	1	2	3	4	5
10 その他（自由にお書きください）					

Q3. (1) 京都府立大学における研究環境について、以下の項目の該当する番号に○印をつけてください。

	とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
1 就学時間が自分の希望に合っている	1	2	3	4	5
2 研究をするうえで適切な指導を受けることができる	1	2	3	4	5
3 性別に関係なく、自分の能力を発揮できる環境にある	1	2	3	4	5
4 研究室や機器等の設備面における研究環境が整っている	1	2	3	4	5
5 学内に、研究や進路について相談できる人がいる	1	2	3	4	5
6 学内に、研究や家庭を両立している良きモデルがいる	1	2	3	4	5
7 その他（自由にお書きください）					

Q4. 現在、研究生生活において、困ったり悩んだりしていますか。該当する番号に○印をつけてください。他にもあれば自由に挙げてください。

	とても悩んでいる	やや悩んでいる	どちらともいえない	あまり悩んでいない	全く悩んでいない
1 経済的なこと	1	2	3	4	5
2 健康面	1	2	3	4	5
3 希望進路(就職先)につけるかわからないこと	1	2	3	4	5
4 希望進路(就職先)が明確にならないこと	1	2	3	4	5
5 研究と結婚・育児等を含めた将来のライフプラン	1	2	3	4	5
6 家族の理解が少ないこと	1	2	3	4	5
7 指導教官や研究室内の人間関係	1	2	3	4	5
8 研究(論文)の進め方	1	2	3	4	5
9 研究における自分の適性	1	2	3	4	5
10 その他（自由にお書きください）					

Q5. あなたが研究生生活で困ったり悩んだりしたとき、相談相手として頼りにしている人は誰ですか。該当する番号に○印をつけてください。

	とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
1 指導教員	1	2	3	4	5
2 指導教員以外の教員	1	2	3	4	5
3 研究室の仲間	1	2	3	4	5
4 研究科の先輩・後輩	1	2	3	4	5
5 家族（親・きょうだい）	1	2	3	4	5
6 友人・恋人	1	2	3	4	5
7 学生相談室	1	2	3	4	5
8 その他（自由にお書きください）					

Q6. 現在のあなたの研究生生活はどのようなものですか。該当する番号に○印をつけてください。

	とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
1 研究に意欲を持って取り組んでいる	1	2	3	4	5
2 研究・指導体制に満足している	1	2	3	4	5

	とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
3 研究の設備環境に満足している	1	2	3	4	5
4 研究において能力が発揮できている	1	2	3	4	5
5 将来についての目標が明確になってきている	1	2	3	4	5
6 研究生活全般において満足している	1	2	3	4	5
7 その他（自由にお書きください）					

Q7. 男女共同参画推進室が次のような支援をする場合、あなたは利用したいと思いますか。該当する番号に○印をつけてください。他にもあれば自由に挙げてください。

		今必要がある		どちらとも いえない	今は必要ない	
		ぜひ利用したい	利用したくない		今後必要になったとき ぜひ利用したい	利用はしたくない
1	経済面での支援	1	2	3	4	5
2	健康面（女性の場合は女性特有の悩みも含む）の支援	1	2	3	4	5
3	進路・就職相談窓口	1	2	3	4	5
4	進学・就職支援のための講座（OB/OGの体験談等）	1	2	3	4	5
5	大学院生同士の交流の機会	1	2	3	4	5
6	将来への不安等悩みに関するキャリアカウンセリング	1	2	3	4	5
7	先輩や女性教員から具体的な助言をもらえる相談制度（メンター制度等）	1	2	3	4	5
8	研究支援のための スキルアップ講座					
	a 英語論文作成	1	2	3	4	5
	b プレゼンテーション能力	1	2	3	4	5
	c 調査研究スキル等	1	2	3	4	5
	d リーダーシップ開発 研修	1	2	3	4	5
	e 科研費の獲得	1	2	3	4	5
	f その他（ ）					
9	その他（自由にお書きください）					

Q8. あなたは、次のような悩みが生じた場合、大学院生専用の相談窓口があれば利用したいと思いますか。
該当する番号に○印をつけてください。

	是非利用したい	機会があれば利用したい	どちらともいえない	利用する予定はない	利用したくない
1 経済面での支援	1	2	3	4	5
2 健康面	1	2	3	4	5
3 進路（就職）のこと	1	2	3	4	5
4 研究と結婚・育児等を含めた将来のライフプランのこと	1	2	3	4	5
5 人間関係のこと	1	2	3	4	5
6 研究の進め方について	1	2	3	4	5
7 その他（自由にお書きください）					

Q9. 男女共同参画推進室について、また男女共同参画推進室が実施している以下のサービス、制度について
知っていますか。該当する番号に○印をつけてください。

	知っている		知らない
	利用したことがある	利用したことがない	
1 男女共同参画推進室の場所について	1	2	3
2 男女共同参画推進室主催のセミナー、サロン、シンポジウムへの参加	1	2	3
3 男女共同参画推進室のニュースレター、リーフレット	1	2	3
4 男女共同参画推進室のホームページ	1	2	3
5 研究支援員制度（女性研究者研究支援）	1	2	3

Q10. あなたが研究を進めていくうえで、障害となっていること、不安に感じていること、課題等があれば
記入して下さい。

Q11. 男女共同参画推進、若手研究者育成等の取り組みに関するご意見・ご要望、ご提案等を自由に記述してください。

Q12. 最後に、あなた自身についてうかがいます。該当する番号に○印をつけてください。

(1) 性別 : 1. 男性 2. 女性

(2) 研究科 : 1. 文学研究科 2. 公共政策学研究科 3. 生命環境科学研究科

(3) 学年 : 1. 博士前期課程 () 年 2. 博士後期課程 () 年

学部 : 1. 学内出身 2. 学外出身

立場 : 1. 学生 2. 社会人学生 3. 留学生

(4) 年齢 : 1. 25 歳以下 2. 26～30 歳 3. 31～35 歳 4. 36～40 歳 5. 40 歳以上

(5) 配偶者 : 1. 有り 2. 無し

(6) 子 : 1. 有り 2. 無し

ご協力ありがとうございました。

V.男女共同参画推進委員会体制

平成 26 年度 男女共同参画推進委員会 委員一覧

小沢 修司	副学長 男女共同参画推進委員会委員長・男女共同参画推進室長 公共政策学部教授（意識啓発プロジェクトリーダー）
渡邊 伸	文学部学部長
野口 祐子	文学部教授（研究者両立支援（かつらプロジェクト）リーダー）
吉岡 真佐樹	公共政策学部学部長
渡部 邦彦	生命環境科学研究科研究科長
高野 和文	生命環境科学研究科教授
リントゥルオト 正美	生命環境科学研究科准教授 （若手研究者育成（あおいプロジェクト）リーダー）
朝田 佳尚	公共政策学部講師
稲村 智史	事務局長

男女共同参画推進室 調査ワーキンググループ

リントゥルオト 正美	生命環境科学研究科准教授 （若手研究者育成（あおいプロジェクト）リーダー）
高野 和文	生命環境科学研究科教授（あおいプロジェクト担当）
竹中 祐二	公共政策学研究科 学術研究員（分析、執筆）
鈴木 暁子	コーディネーター
長谷川 里奈	特別研究補助員

文部科学省科学技術人材育成費補助事業
女性研究者研究活動支援事業（一般型）
（活動期間：平成 25 年度～平成 27 年度）

京都府立大学 大学院生の現状とニーズ調査報告書 2014

発行日 2015 年（平成 27 年）3 月発行
発行 京都府立大学男女共同参画推進室
連絡先 〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5
TEL 075-703-5143
FAX 075-703-5149
URL <http://kpu-sankaku.jp/>
E-mail danjo@kpu.ac.jp